
多重変奏曲

妄想少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多重変奏曲

【Nコード】

N3296C

【作者名】

妄想少年

【あらすじ】

これから伝える物語は酷く無粋で酷く無関係な物語だ。関係の無い場所で勝手に始まり、関係の無い場面で勝手に終わった物語だ。それを読みたいというのなら僕は止めないが、出来れば見ない方が懸命である。それでもみたいと言うのなら止めやしないが……そうだなヒントというならこの物語は一本の物語が合わさってできた物語だ。だから多重変奏曲。その言葉が一番相応しい。

序章：認知と忘却

「生きているという事の証明出来なければ、それは死んでいると同じ事では無いのだろうか？」

その考えに否定出来る理由も無ければ肯定する理由も同一である事は確かだった。

彼もしくは彼女は思量深げに悩むと、口から『んー』と声を漏らした。

どうやって伝えるべきか悩んでいるという感じだ。

脳にある情報を誰だって人に伝える事は難しい。簡潔にいかにか簡単にまとめる作業は人によって言語ひいては単語をどれだけ知っているかによって変わるし、相手の読み取る能力も異なってくるからだ。

僕だっけ自分の頭にある事を言語にまとめるのはかなり苦手だ。

どうしても起承転結というのが出来ないのである。話始めたら途中で止まってしまい、その後どうしても口ごもってしまう。

「例えば認知がされなかった人間はどうだろう、親が腹を痛めて産んだ我が子を認知出来ない場合、その子供は果たして生きていると言えるのだろうか？ はたまた、子が親を忘れた場合もそれは生きていると言えるのだろうか？」

やはりそれも否定も出来なければ肯定も出来る筈も無い。前例が無いのだ、所詮この話は仮定でしか無い訳だし、想像でしか無いわけだから論議としては間違っちゃいないだろうけど、生きる死ぬの問題に対しては少しだけ問題点がズレているような気がした。

「それは産まれて来なかったと同意語なのでは無いのだろうか？」

記憶は酷くあやふやな物であるのだから、親が自分の子供では無いと理解した場合、もしくは誤認した場合、それは無意識による酷く無粋で滑稽な虐待では無いのだろうか？」

虐待という定義に子供を認知しない。などという項目があるのならそうなのかも知れないが、虐待は暴力と精神的外傷の産物では無いのだろうか？ そもそも忘却、はたまた痴呆にかかった親を誰が責められようか。親に悪意は無い筈である。虐待は悪意もしくは憎悪、怨念、好意の部類に入るのでは無いのだろうか？

可愛すぎて子を殴る親も居るかも知れないでは無いか。

前例はやはり 見た事は無いが。

「ん？ 君はまた至極当然のように虐待とは暴力であると考えて無いか？ 今はそんな話をしていないだろ？ 認識しているか、していないかの話だ。そもそも君は虐待は肉体的外傷しかり精神的外傷などと考えているのか？ 私はそうは思えない。虐待とは親に異常に愛されているという事だ」

「なら虐待などしない筈じゃないか」

思い上がって訊いてしまった。

こうなると僕の友は喋る事を止めようとはしない。どこぞの古本屋亭主兼神主によく似ていた。

「いやそれが異常なんだ。彼らもしくは彼女らは子供のあやし方、愛情の注ぎ方を知らない。それは彼らひいては彼女らが幼少の頃に愛されなかつたからだ。それ故、その愛情を歪んだ形でしか表現が出来ない。彼女ら彼らはだから暴力によって愛情を注ぐんだ」

歪んだ愛情を持った人間。

心理学的根拠に基づくならば幼少の頃に受けた記憶とでも言うのだろうか？

虐待をしている親というのは科学的調査では八割方、幼少の頃に肉体的外傷を受けている。それは隠しようもない事実だ。

しかし、その事実と忘却。

一体どのような関係があるというのだろうか？

「関係は無いさ。ある訳が無いだろ？ ただ虐待と忘却は切っても切れない関係にあるんだ。言うなれば脳と心のような関係だよ」

なる程。彼女いや彼にしてはもっとも分かり易くもっとも歪んだ比喻をだと僕は思う。

しかし。

「君がオズの魔法使いが好きだと始めてしつたよ」

少しだけ彼女と彼に向けて皮肉を垂れた。

こつでもしないとまた彼女と彼のペースに持っていかれそうだからだ。

反論を唱えなければ彼女しかり彼はいつも僕を丸めこむのだから。

「あの作品は最高だよ？ 沙希がよく見るんだが何回見ても飽きないね。昔は心と脳は別々であると思われていたのだから科学の発展がよくわかる」

確かに昔は人の脳と心は別々の物だと考えられていた。それこそ案山子が心。ロボットが脳であるかのようにだ。それはどこの国でもそうだった。それは日本も例外ではない人魂、魂、鬼火などの存在は脳ではなく心にあると思われていたのだ。

実際は精神や精神的という類はすべて脳にあると分かったのだが。

だが　今現在目の前にいる人間は一体どうだろう？
コイツの場合は心と脳。
どちらに分けられると云うのだろうか？

「なんだ、僕か？　いや、僕らが僕らはどちらでもない、心が二つあるんだ」

彼、彼女はそう言って笑う。

肩まであるしなやかな黒髪に、切り目の細い瞳そんな目でありながら瞳孔は人より少しだけデカくて限りなく深い闇によく似ている。汚れをしないような真っ白なカッターシャツを第二ボタンまではずしているせいで、ピンクのブラジャーが少しだけ顔を見せている。

女の子独特のふつくらとした輪郭はどこか幼女を思わせる。

そう彼女は女だ。

女であり男なのだ。

ただ少しだけ変わった……いや、凄くまともでもまともでは無い理由があるだけだ。

彼女の名前は『速水　沙希』という。

そして

「で？　今日はどうしたんだ。僕が“出ている”日に会いに来るなんて珍しいじゃないか」

そう言って彼は笑う。沙希の顔をして笑みを浮かべる。それは彼氏という名称を持つ僕にとって面白いとは言えない事だった。

「また何か問題事か？　親友」

「その呼び名はやめてくれ、お前が生きてるみたいに感じる」

そう言つと彼は苦笑でもするかのように右頬だけを上げて苦笑する。

『まだ生きてるさ』そう言わんばかりの苦笑だった。

しかし僕は本題に入らなければならぬ。その為今日、ここにやって来たのだから。

そうじゃなきゃ何しにここに来たのか分かった物ではない。

「さつき認知という話をしたが、人間がもし忘れられない存在だとしたらお前はどのなると思う？」

忘れられた存在と忘れられない存在。

その価値は同一であるのだろうか？ はたまた等しい存在なのだろうか。同一では無いはずである。裏とも表ともつかない対極に位置する存在だ。

「ふむ。また奇妙な事を言い出すね君は。忘れられない存在か。多分、仮定で論弁を述べるといふならば多分、死ねないだろうね」

彼はそう言つ。

しかし、その後彼の顔から笑顔が消える事になる。

それは確実に忘れられない存在であった。

「速水 己克という名前の死体が上がった。年齢不詳の放浪者だ。

お前の死体だよ。二年前に死んだ筈の な」

彼は絶句を通り越して僅かに苦笑した。

『確かに忘れられない存在』だと苦笑しながら静かに表情を消した。

これから伝える物語は酷く無粋で酷く無関係な物語だ。

関係の無い場所で勝手に始まり、関係の無い場面で勝手に終わった物語だ。

それを読みたいというのなら僕は止めないが、出来れば見ない方が懸命である。

それでも見たいと言つのなら止めやしないが……

そうだなヒントというならこの物語は二本の物語が合わさってできた物語だ。

だから多重変奏曲。

その言葉が一番相応しい。

序章：認知と忘却（後書き）

大嫌いな大嫌いな連載をしてしまいました。
でも連載書きたかった

下手すりゃ途中で飽きるかもしれませぬ。

投稿は不定期ですがあまり気にしないで下さい。
マイペースでやりたいと思います

第一章：死体の訳

これが死体であると言われたら何人の人間がその虚偽を信じるだろうか？

事実、目の前の死体は確かに死んでいるのだから虚偽も真実も無いのだけれど、それはただ単純に霊安室という特別な空間に居るから脳がそう判断しただけであって、コイツはもしかしたら死んでいないかも知れないとは考えた事は無いだろうか？

はたまた死体ではなくドッキリであると考えた事は無いだろうか？

何故、今になってこんな事を思っているのかと言えば、それは僕にとつてこの場所は何故か嘘っぽいというか、偽物の感じがして居たたまれなくなっているからだろうと僕は推測する。

だからこそ今、目の前にいる死体が死体だと思えないのはその性だろうと僕は考える。

薄緑の非常口を示す看板が怪しく十畳あるかないかの部屋を照らし、僕の右隣には大層大きな仏壇がこの部屋の一畳をまるまるぶんどつていた。そして、その部屋の中央には顔も知らない見知らぬ人間の死体が長テーブルのような堅いベットの上に眠らされている。僕は何となしにその死体を見つめながらコンクリートの壁に背中を付けてもたれている。

コイツは本当に死んでいるのだろうか？ と本気で思う。

例えばドッキリ企画だとか、例えば間違えて眠っているだけだとか……

そんな風に考えるが非現実的過ぎて欠伸が出た。 そんな事を考えるならば当たらない二億円の使い道考えている方が幾らかマシだと思つ。

コイツは死んでいるのである。
それは変えようもない事実であり、脳がそう判断しているのだから
そうであるのだ。

しかし。

脳という曖昧かつ単純な器官は時間と場所とお金さえ揃えばいくらでも騙せるのでは無いのだろうか？ もし仮定の話だとして、二年前に死んだ祖母によく似た人を連れて来たとして、僕の家族に見せたならば、家の家族はそれを見て何て思うだろうか？

クローン等と思うかも知れないし、はたまたソックリさんだと見破るかも知れない。時間によっちゃ幽霊という存在に見えるのでは無いのだろうか？ 脳という存在はそれ程までに曖昧で単純なのだ。だからもし死体が動き。喋り。笑ったのならば脳はそれを死体と呼ぶのだろうか？

死んだ肉体と書いて死体である。

心臓が止まっているのにも関わらず行動する死体はそれは死体と
いうのだろうか？

それは一般的には幽霊と呼ぶ存在では無いのだろうか？

はたまた脳死している人間が動き出したならばそれは死体と呼べる
のだろうか？

科学的というならば確かに有り得ない事だが、止まった心臓を機械
心臓に移植した場合、それはもう死んでいると呼べるのでは無い
だろうか？

全てを機械に組み合わせ、組み込まれた人間はそれこそ生きた
死体では無いのだろうか？

やはり前例は見た事無いが

場所は城崎病院地下の霊安室である。

周りはコンクリートで囲まれて換気良好などというには些か空気が腐敗し、沈澱しているように思う。

部屋の中央には先程述べた顔も知らない他人が其処に寝転がっていて、勝己はその隣に設置されてあるパイプ椅子を反対に座りながら死体を眺めていた。

「初めまして勝己」

揶揄するかのように静かな霊安室にいつもより二倍はトーンの低い沙希の声がこだまする。

前回も述べたと思うが、沙希は勝己で勝己は沙希だ。

それは“そういう事”である。

そういう事でしか理解する術が無いのだ。

無駄に二重人格と考えたとしても、その答えは半分当たりで、半分ハズレであり。

勝己は規則的に現れるのだ。

いや、沙希が規則的なのかも知れない。

基礎体は沙希であるが、意識的に強いのは勝己である。だから勝己が出てきた時には沙希は何も知らなくて、沙希の記憶は勝己にはあるのだ。

言うなれば体は沙希で頭は勝己である。

けど沙希だってデメリットばかりじゃない。肉体の権限は主に沙希にあり、勝己が沙希の体を使うとなると、凄い勝己が消耗するのだ。

歩くにも杖を使わなければならなくて、階段を上る事さえ彼は息切れしながら上らなくてはならないのだ。

彼曰わく心の拒否反応らしいが……

未だに信じてない僕が居る。

まあ何がそうなって、彼女の体に彼が入ったのかは分からないし、誰がどうやって彼女の中に彼を詰め込んだのかすら理解できない。

ただ、彼は沙希の中に居て沙希は勝己の中にいるのだと理解する
ほか無いのだ。

精神的矛盾。

実務的矛盾と言ってもいい。

そうあるべき必然とでも言うかもしれない。

死んだ筈の彼は単純に彼女の中に居て、彼女は死んだ筈の兄を心
という存在に住ませている。

心という存在は非現実的な解釈でしかないと思うけど、それは考
え方の違いだけで現実的な解釈なのかもしれない。

いや。この世に現実的という言葉の存在がある事自体おかしい話
だと思えない人間。僕が非現実的対象なのかも知れないな。

勝己は死体に被せられた布を半分だけめくると、人間と言うに
はあまりにもかけ離れた人間が虚ろを捉えてそこに横たわっていた。
認識、見識など問題ではないくらい、鼻がへしゃげ、曲がり、眼
球の瞳孔は片目だけ無くなっている。

顔には不可解な傷が無数に走っていた。よほど強い力で鈍器を振
り落とされたのだと思う。

じゃなきゃそれは人の力では到底有り得ないぐらいの破壊だった。
よほどの憎しみがあつたのか、それとも恨みつらみの類かは知ら
ないが、相手の逆鱗に触れたのだろう、じゃなきゃここまで壊滅的
に壊しはしないだろ。

勝己は目を細めて死体を見ると訝しげな顔をして睨むように僕を
見た。

「……勝己変わったな」

無理も無いのかも知れない。

前回の方が些かマシであったと僕だって思う。まだ前回の方が顔も潰れて無くて、顔もちゃんと認識出来たし、表情だってまだ読み取れた。

今回は少しというか確実に認識というレベルを越えている。これが自分だと言われる勝己にしては少しツライ物があるのだろう。

「沙希……頭悪くなったのかな？」

「そこで呟く事じゃないと思うんだが？」

寧ろ、妹の頭を疑う兄というのはどうなんだろうか？ そもそも、コイツは死んでるって事を理解しているのだろうか。この死体は沙希が判別したからであって元の肉体は二年前に消滅している筈なのだが？

「まあ状況はどうであれ、今回の僕はコイツになった訳だ」

「そうなる」

白い布を死者にまた被せた勝己は、後ろの背もたれに持たれながら両腕を組み、ん〜と唸った。

「何か考え事か？」

「考え事というか……まあ言うなれば客観的観測だな」

勝己はそう言ってまたん〜と唸った。

またおかしな事を言う。

客観的観測なんて他人から見ればそれこそ客観的では無いのだからか？ 当事者と被害者ならばその見解が必要かも知れないが当事者ではない勝己にとって、それは客観的であって主観的などという弁論かつ比喩にはならないと思うんだが……

「君はつくづく阿呆だね」

「何でだよ」

「客観的観測の意味でも考えているのか？ そんな事子供でも分かる見解だと思っただけど？」

勝己はそう言って足をぐうと伸ばすと体を反らす。

豊潤とは言えない沙希の胸がぐうと突き出される形となって勝己はゆっくりとその反りを元に戻した。

「例えばだ。人間という一生命体は客観的観測など出来ないのだよ」

「それはまた大胆な仮定だな」

「仮定？ これはちゃんと心理学に基づいての事さ。嘘だと思っんなら調べてみるといい。例えばそうだな、無能な警察だ。警察というのはまず客観的推測もしくは客観的観測をしないで動機から入る。次に被害者の人間関係、被害者と犯罪者の関係や殺人までの動機、で最後に物的証拠と犯罪に衝動的関係、やはり動機こんな所だ」

両手を上げて勝己は肩を少しだけ上げると暇そうに欠伸をする。

「所詮は仮定の話だろ？ そう上手く心理学が人間に追い付ける筈は無いじゃないか。たかたが百五十年の歴史ぐらいでそんな簡単に人間が分かっただまるか」

心理学。宗教学。法経医学。

ありとあらゆる奇妙な学問だけを頭に入れる我が友はにやりと笑むと、舌を少しだけ出して唇を舐めた。

それがまた沙希の顔であるのだから何とも妖艶な仕草である。

「じゃあ君は、いま目の前にある死体はどうやって殺されたんだと思っただ？」

目で死体を指した勝己はそのまま目線を上に上げて僕の方を見てくる。

「そりゃあ鈍器か何かで殴られたんだろ」

「何故？」

「憎しみとか恨みとかその辺だろ？」

「その理由は？」

「理由はだから……」

憎しみとか恨みとか

「それが動機だろ、動機と言わなくて何て言うんだ？」

「それは誘導尋問じゃないか、君が理由などと言わなければ……」

はたして本当にそうだろうか？

もし、他人に被害者の死因を訊かれた場合、外傷を調べれば済むが、加害者の場合はどうだろうか？

相手が何故殺したのかという動機から入らないだろうか？

「でも……」

「でも、けど、だけど　その接続詞からなる言葉は全て言い訳しかならないんだ。もしくは等は論外だ。仮定にしかならない」

皮肉っぽく勝己は笑うと楽しそうにしかし、楽しんでなんかいないような笑みを表情に張り付かせたまま、僕の目を見る。

僕はこの目が嫌いだ。

大嫌いという程でも無いが、この目は勝己の瞳によく似ている性だと僕は思う。そういう時は無性にコイツは沙希だと言いくるめなきゃならないから嫌なのだ。

「ただ　ちよつとだけ言い訳するならば、人間は人間でも動機不十分でありながら人を殺せる人間は沢山いる」

ふと思考が止まる。

何をいきなり言い出しているのか判らなくなったからだ。

「動機が無くて人を殺せる人間？」

勝己は小さく肯定して、組んでいる腕を解いく。

「百人中五人ぐらいかな？　多分」

「多分とはまた珍しいな」

皮肉を皮肉で返してやると右頬だけを上げてまた勝己は苦笑する。

「僕も完璧じゃないからね。普通の人間心理には興味はない。ただ、普通だからこそ、人間はおかしくなれるんだよ。考えてみた事はあるかい？　例えば普通という言葉。凡人という言葉。全てが全て人間の異質をひとくり纏めた言葉だと君は気付いてるかな？」

「普通は普通以外何も無いだろ。それ以外になんの意味があるんだよ……」

勝己は呆れた　とでも言いたげに目を細める。

「じゃあ君が考えてる普通という言葉はどういう意味だ？　凡人とは？　普通っていうのは普通だから普通なのさ……」

いまいち理解出来ない。

理解というか……意味が理解できない。

勝己は何を言い、何を比喻しているのかが判らなくなってくる。

「判らないって顔をしてるな……例えばだ。人間というのは初めから最後まで異質が異端なんだ。普通なんて人間はいないのさ。どこか特化した人間。どこか劣化している人間が大半だ。けどそんな基準を多数大勢がひしめいているから普通なんて言葉を作ったんだ。天才と異質を区別する為にな。なら普通って何だ？ 人間の大半が占める普通の人間が殺人を犯すだろうか？ 普通の人間が他人を区別するだろうか？ 普通の人間があまねく簡単に他人を落とし入れるだろうか？ 普通 普通、普通普通普通普通。人はそれを当たり前のように繰り返す。だが普通なんてものは異質から見れば異質で、天才から見れば無能の集まりなのさ」

長い長い演説を一気にまくし立てるかのように勝己はいうと溜め息を一つ吐いた。呆れたようなそんな感じた。

「分かってる分かってるよ。何で異質がいるのに殺人を犯す人間がいるのかって事だろ？ 君がいま訊きたいのは」

たまにコイツは理由も無しに僕の心を予測する。予想といってもいい。勝己はたまに人の心を簡単に予想し、理解する。異質と普通を区別するのならばコイツの方が異質だと僕は思う。

いや、初めから異質なんだな

「仮に人が人を殺すのには動機が必要だとさっき言ったけど、人間を殺すのに理由も動機も必要はないのさ。ただ呼吸をするように人を殺せる人間だっているのさ。憎しみ恨みという根本的な根がない人間は人を殺す理由という物すら最初から持っていないんだ。あるのは後付け。快樂とはまた違い“そうである事”何だよ。目が合っ

たから殺す。触れたから殺す。とりあえず殺す。暇だから殺す。そんな思考回路をしている人間がいらないと思うかい？ 何故そう言い切れる？ 君の好きな前例が無いからか？ それがいるのさ……普通である人間がね。隠してるだけだ。異質とはまた違う。異質とも天才ともつかない普通の人間がね」

勝己はニヤリとほくそ笑むと片手を上げて、眠そうに目を擦っている。

「どうやらそろそろ限界のようだ。」

もうすぐ沙希が帰ってくる予兆だ。

「じゃあ後頼むよ。僕はまた二日後に現れるから。それまで調査頼むよ。僕は些か疲れた」

勝己はゆっくりと背もたれに持たれるようにして、ズズズと重力に従いながら落ちていき、最後はゆっくりと背もたれに身を任せながら眠った。

溜め息を吐きたくなる。

何も分かった事などないし、ここに来た意味すら僕には無かったような気がする。長話しただけだ。しかも相手は死んだ筈の人間で、その死体が目の前にあるのだから異質としか言えない。

「はあ……うんざりだ」

例えば一つの心、脳でもいい　に二人の人間がいるのならば、それは異質と言えるのだろうか？

例えばそれを隠しながら生きていた場合、それは他人から見れば普通の人間では無いのだろうか？

人知れず多重人格な人間がいたっておかしくは無い筈だ。

ただ他人がそれを気付かないだけであって、そいつ等は確かに存在しているのでは無いだろうか？

前例はやはり……

いや、そんな人間は見た事は無いが。

いや、それは嘘だな。

昔に会ってる。

雨の日に高校で……

どしゃ降りの雨の中で

彼女は踊っていたのだ。

彼女は……魔法使いだと感情の無い顔でそう語った。

第二章：魔法使いの矛盾

「魔法使いは魔法を使えない」

「なら、一般人と対して代わらないだろそれは……」

「魔法使いは魔法を使うから魔法使いなんかじゃなくて、魔法使いは魔法使いと思うから魔法使いになれるの」

「それはただの自称だろ」

「それが自称じゃないんだよ。自称魔法使いは魔法使いと定義されないんだ。魔法使いは魔法使いになれるから魔法使いなんだよ」

「どういう意味だ？」

「魔法使いは魔法使い。魔術も魔法も何も使えない。」

「だけど自称は本当に何もできない。魔法使いは出来るっただけ」

「だけど魔法は使えないんだろ？ なら矛盾だろ」

「矛盾は魔法使いの特許だよ。矛盾だからこそ魔法使いは魔法使いになれるんだから」

「 意味が分からん」

「分かんなくていいよ。ただ訊いて欲しかっただけだから」

「なら気が済んだか？」

「……だいつきらい！」

夢を見た。

正確には夢じゃなくて過去だが……

だから夢は嫌いだ、いや眠る事自体が嫌いなのかも知れない。無防備になる。過去を振り返っても意味は無いように、夢を見る事も同じ位、意味は無い。

忘れてしまった思い出と、そうあるべき未来の矛盾した世界。

夢とはそういう物だ。

“もしも”を現実を持ってきて、その思い出をあるべき未来の破片へと変換する。

その偽りの世界になんの意味があるのだろうか。やはり悔やんでいるのだろうか？ それこそ、欺瞞だと言えないような気がする。

望む資格はとうの昔に置き忘れてしまったというのに……

時計を見ると科学の無駄な発展のせいで何でもかんでもデジタル化された時計が八時半を示していた。

遅いのか早いのかよく分からない時間だ。サラリーマンなら遅刻だし、自営業の人ならまだ寝ててもいい時間だ。

いや。自営業でも市場とか行く人も居るだろうから、やっぱり普通の人間からしたら遅い時間だ。

ベット代わりのソファから半身を起こすとプーさんのイラストが描かれたタオルケットが床に落ちてしまった。

どうやら寝ている間に掛けてくれたらしい。

ブラインドの隙間から差し込む朝日が尚一層、埃を明確にしている、空気中に嫌という程、紛れている事を示されていた。

灰色の業務用机には大量の本と無数のファイルが乗っていて、この主様は片付けるという事を多分知らない。

遠くの方では土を固めているのか鉄骨を地面に差し込んでいるのかは知らないが何かを打ち込む機械がドン！　ドン！　と規則的に或いは規則性に従って聞こえてくる。

此処は僕が高校中退した頃から勤めている仕事場兼事務所である。

部屋の隅には名画や重要文化財、大金の価値のある国宝級まで……そんな品々が乱雑に置かれているのはここの主が絵や彫刻に興味が無いからであろう。

じゃあ何故、こんな仕事をやっているのかと言えば、本人曰わく

給料がいいからだそうだ。

「後二時間寝てたら顔に落書きしてやるうと思ってたのに……」

真つ白なマグカップを両手で包み込みながら、僕を見下ろしている女性。

白色の長袖ワイシャツと黒いライダースのパンツを履いたポニーテール姿の女性はやんちゃ坊主。この場合やんちゃガールだがをそのまま成長させたような笑顔を浮かべた女性がソファアを挟んだ後ろで笑いながら立っていた。

春日井 黒猫という名の修復師だ。

一応断っておくが本名であり、修復家じゃなくて修復師だ。

彼女は何故か修復家と呼ばれるのを嫌っていて、修復師と自分で造った造名を好んで使っている。

「何時間位寝てました？」

「知らないよ。私はあんたに興味は無いからね。何時間寝てようが

私の生活に支障は無いからね」

「念の為に確認しますけど……」

「何？」

「僕ってここの従業員ですよね？」

「一応、書類上はそうなってるね」

独特な筋肉だけを突っ張ったような愛想笑いを浮かべ彼女は一人掛けのソファアに座るとコーヒーカップを口元に持っていき、ふうと溜め息を吐いた。

「今し方、一点完成してね。とりあえず一休みって感じさ」

「言ってくれたら手伝ったんですが」

「馬鹿かお前。スヤスヤと寝息起って幸せそうな顔してる奴を誰が

起こせるか。それこそ罰が当たるよ」

「あれ？ 怖い物は無かつたんじゃないでしたっけ？」

「ゴキブリと神様とタマネギ以外はね」

彼女はゴミだらけな木材のテーブルにマグカップを置いて、胸ポケットからメンソールを取り出すと、慣れた手つきでそれを口に持っていく。

「それで……成果はあつたか？」

真剣な表情でそう訊いてくる春日井さんは、時として怖い物がある。

カチャンとジッポの蓋が下がり、いつの間にかタバコに火が付いていた。

「いえ、あまり無いですね。昔話と脳の雑学ぐらいですかね」

「まあ初日だしな。ただあのペテン師は分かっている癖に言わない事が多々あるからな……」

「ペテン師ですか」

それはまた上手い事を言う。というか春日井さんと勝己は相性が悪いのだ。険悪という訳では無いが、勝己は春日井さんを罵る時にいつも『年増で三十路でガメツくて女を女とは思えない可哀想な女』と罵っている。

「そもそもどっちが主人格なんだ？ 沙希の体を使ってるから沙希か？ それともやっぱり」

「どちらも主人格ですよ。精神的と言うなら勝己だし、肉体的というなら沙希ですね」

「何かややこしいなあ」

煙草の煙をわっかに作り天井に向かって吐き出しながら春日井さんは馬鹿にするかねようにき捨てる。

「……結構、長引きそうか？」

「身元がわかりませんからね。元を辿るのはツライ物がありますね」「そっか」

床に煙草を捨ててブーツの先で揉み消し、肺一杯に溜めた煙を吐き捨てる。と少し悩んだように訊いてくる。

「実はなお前の件の他にもう一件来てるんだ」

「……他にですか？」

「うん、ちよっとだけ頼まれてくれるか？」

珍しいと言えば珍しい。

春日井さんは大抵、仕事は一件一件こなす人なのだが……しかも別件と言うなら尚更である。

「悪いとは言わないですが　今回は勝己の件も絡んでるんですよ？」

「だからこそさ。だからこそアイツに絡んで欲しいんだよ。というかアイツにしか解決出来ないんだよ」

それはまたやっかいな話だ。

しかも勝己絡みとなると尚更である。

一ヶ月に一ヶ月という頻度で現れていたのに、二件発生とは……少しだけ嫌な前ぶれのような……そんな感じがする。

「頼めるか？」

「別に構いやしませんか……何かあったんですか？」

春日井さんにそう訊くと春日井さんは思量深げに唇を二、三度触った後、決意を決めかねるかのように言葉を濁す。

「事件というなら事件だが、ちょっと不可解でな。明らかにおかしいんだ」

「おかしい？」

「ああ、連鎖反応だ」

連鎖反応？ それもまた興味がある。

いや、興味というよりは好奇心か。

「今月に入って六人死んだ。一週間ごとに一人、同じ時間、同じ場所でな」

「どういう事です？」

「人が確実に死ぬんだ。催眠術みたいにな。特に共通点も無いんだが、確実に死ぬんだ」

「ん？ それおかしく無いですか？」

「おかしい？ お前はこの事態がおかしいって思うのか？」

信じられないとでもいいたげに少しだけ睨んだような目線を春日井さんは僕に向けると、小さく溜め息を吐いた。

「異常なんだよ」

背筋に虫が這ったようなそんな感覚。

鳥肌が右腕から電子反応するかのように全身を強く通っていった。凄みのある声で春日井さんは尚も続ける。

「自殺やら他殺やら憶測はやたら飛び交っているんだがな、どうも

……な」

「どういう事です?」

「死因が……な」

やはり言葉を濁すあたり何かあるのだろう。いや、何かというべきでは無いな。人がもう死んでいるのだから。

「死体は必ず二人。相手の体を刺し合って死ぬんだ」

「……それはまた」

「奇怪か? それとも鬼畜か? まだあり得る話だ。一緒に死にたい奴なんざ大勢いるからな」

「ん? 意味がちよっと分からないですね」

「そのまんまの意味。一人では死にたくない。一人では死ねない。なら他人となら怖くない。私は一人じゃない。だから殺して、殺される」

足をソファアーの上に乗せて、体育座りをした彼女はユラユラと下に揺れながらそういう。

端から見ている僕にとつては行儀が悪いとは言わないまでも、もう少し大人っぽく振る舞って欲しいと思う。

余談になるが、この人はテレビ局主催のパーティー会場でカメラ回ってるのにも関わらず、自前の五重箱におかずを詰め込んで持って帰ってきた勇者である。

勿論、主役は春日井さんだったから呆れる他無いが。

「だからこそ、その気持ちは分からないでも無いんだけどね。ただ六人という数が異様なんだよ」

「異様ですか」

「異様だね。異質とはまた違う。異様で奇怪だ。頼めるか?」

彼女はそういつとソファアの背もたれに後頭部を押し付けながら、虚空を眺めて小さく溜め息を吐いた。

「憂鬱そうですね」

「そりゃあね。修復師が聞いて呆れる。何が修復師だ。修復なんて何も出来やしない」

修復師

僕がそう名乗るのもおこがましいのかも知れないが、僕達は自分の職業をそう呼んでる。

修復をするのが仕事である。

例えばそれは物であったり、関係であったり、事件であったりだ。それを全て纏めて僕達は修復師と呼んでる。

依頼される事は大抵は美術品だけだけれど、事件や関係であったりもする。

そんな時は事件や関係を先に修復する事を前提としている。がしかし

「事件ばかりじゃ憂鬱ですか？」

「そりゃね。修復の仕事はたんまりとあるんだけどね、今は四割が事件だ。探偵だってこんな仕事はしないさ」

「……春日井さんが有能だからでしょ？」

そういつと春日井さんはまた溜め息を吐く。

「有能は私みたいに逃げたりはしないよ。私は無能で無粋な落ちこぼれ。成り上がりのなり損ないさ」

辛く微笑むかのように筋肉を釣り上げた彼女は悲しそうに顔を伏せて、大きく息を吐き出した。

「本当、今更だよ」

西脇という地名のそのまた奥にある研究所に春日井さんは十年という月日の間、其処に居た。

外界と遮断されたその施設は何の研究をしているのだから、漏洩する事を恐れているかの如く、未だにその秘密を内側に隠したまま今でも其処に佇んでいる。

噂では原爆を作ってるだとか何だと噂がはびこってはいるがそれは憶測に過ぎない。

勝己辺りは何かを知っているかも知れないが、僕には検討も付かない。

だが春日井さんは十年そこにいて、逃げ出して来たのだ。

自分の事は話そうとはしない人だから僕が聞いても何も話さないのだ……彼女はそういう経緯の持ち主なのだ。

だから修復師という難しい職種なんかをしているのだろう。

「はぁ……滅入るね、こんな暑さじゃ」

彼女はそういつて外に目を向ける。

青い空に入道雲が浮かんでいて、蝉の声とプールに行くのだろうか？ 小学生達の声が聞こえる。

「……もう夏ですね」

「夏だね」

第三章：切り裂きジャックのその理想

怖い物を恐怖と思えばそれは矛盾になるというのを知っているだろうか？

例えばジェットコースター。

怖いと思う人間がいるかも知れないがあれは恐怖というよりは絶叫である。

例えば幽霊

怖いと思う人間がいるかも知れないが

あれは恐怖というより異質。

例えば虫

怖いと思う人間がいるかも知れないがあれは恐怖というより奇怪。怖いという概念は身を知らぬ恐怖だからこそ怖いのだ。

それは順当と言ってしまえばそれまでだが、その恐怖に絶対などはありません。

触れれば怖いなどもしかりである。

そういう事と思うがこそ、それは恐怖の対象となり、破滅し、懇願し、撃滅する。

並列などは元々アリはしないのだ。

恐怖という存在は恐怖と感じる前が恐怖なのである。

誰もその真意を分かっていないが。

「外に出て、空を見上げたら、落ちちゃったみたいな感じ？」
「意味が分からん」

ここは城崎病院の一室である。

そう地下に勝己の死体があるあの病院だ。

それこそ何の因果があつてこんな所にコイツが居るのかと言えば、

コイツが屋上から落ちたせいである。

沙希は舌をちよこつと出して控えめに自分の頭を叩いた。

沙羅双樹に希望と書いて沙希である。

砂塵で希望と書くのかも知れないが。それは今は使われないしな。今度勝己に聞いてみよう。

ともかく、勝己のもう独りの性質。

表である人格の沙希は屋上から足を滑らした。

それ故に両脚骨折して、内蔵破滅という重度の危険なというか死ぬ直前まで行った。

意識が普通の状態なら死んでただろうが、というか自殺者は地面に落ちる前に死ぬのだが、沙希の場合、意識が不安定な位置にあったから助かったのだと医師はいう。

勝己が覚醒したせいなのか、それともただの天然か。

どちらと聞かれたら天然と即答出来るが無駄に拗ねるのでいうのは止めておいた。

「所でだ」

「何？」

「お前学校どうした？」

「へへ」

何がへへだ。どうにもこうにもコイツはインドアの引きこもり野郎だ。

つつかその代わりに両足骨折してたら本当に無駄骨じゃねえか。

「うまい事言うね」

「誰も言っただろ」

「じゃあ独り言だよ」

「じゃあって何だよ」

「それは、だから、その、ゆえに、そんな、たぶん、その、これは、

という、それとも、そして、それに、どれがいい？」

「接続詞並べて何が楽しいんだ」

「接続詞じゃないのもあるけどね」

「最大級の嫌味だな」

「最高級の慈しみだよ」

「嫌味な奴」

「可愛い奴」

まあこういう奴である。

屋上から足を滑らせて危うく死にかけるといっのは、コイツにしてはやりかねん。

西側に設置されたこの病室は、白から朱に代わり始めていて、沙希の顔に陰りをつけ初めているのだが、これがまた何とも絵になるのだから不思議である。

「そう言えばどうするの？」

「何が？」

「しゅ〜うふく〜し」

のんびりとした口調で沙希はそういうと、爪を操り始める。

「何で無駄に伸ばしてるのか聞きたいんだがな。まあ仕事は行くよ」

「そうですね」

「そうですね」

「死なない程度に頑張っ^やて貰いたいのですが、訊かないよねそれじ

「仕方がない。仕事だしな」

「嫌味な奴」

「可愛い奴」

こればかりは仕方がない。

仕事という名目ではあるが、修復師である僕の仕事だ。

勝己がいなのが少々残念と言えば残念だが、規則的に現れてくれるだけマシというものであるのか？

その前に大量の証拠品から遺品、関連性から最近流行ってる薬まで調べ尽くさなきゃならないのが難点だが、勝己が出てくるまでに分かる所は分かっておきたい。

後は勝己の発想と知識だけが頼りである。

勝己は探偵などという天才ではない。

人より少しだけ違う見方が出来るというだけである。

そもそも探偵などという天才は小説の中にしかないのだ。

一つの証拠だけで何通りも思考し、考え、有り得ない見解を出す。その意見に否定はしないが賞賛もしない。

じゃあ警察のやっている事は無駄という事になるからだ。

地道に聞き込みをし、地べたを這いずり回り、意地でも追いかけて回すその時間がある有り得ない存在が居るだけで何百何千という時間が無駄だったという事になる。

まあ実際探偵という本物はいないのだけだね。

「眉間に皺寄せて何考えてるのかな？」

「さあ何考えてんだらうな」

「自分の事なのに分からないというのも不思議な話だと思うよ？」

「そういうな。人間自分の事分かっている奴何て少ないんだよ」

「ん？ 自分探しする青年みたいな感じ？」

「また違うな。自分のものさしで自分を計ると確実に自分の価値を上げるって話さ。俺はあいつより上だとか下だとか、卑下する事なら誰だって出来るが……卑下した所で自分にはその価値もないと分からない人間が多すぎる」

「つまり、身分不相応って奴かな？」

「簡単にいうとな。まあ人間ってそんなものさ」

「相変わらず悲観的だね。人間はもつといいものだと思うけどなあ」

「そう思える人間は幸せだよ。いや、嫌味じゃなくてだな。本当に

……」

そんな人間が何人居るだろうか？

人間がいいものと思える人間が。

エデンの果実を食べたのも人間である。

戦争を起こしたのも人間である。

森林を伐採し、海を汚し、動物を絶滅させているのも人間である。

地球上全てにおいて人間という種族が底辺だということにも関わら

ず、武器というものを使い、一番増殖をした化け物。

はぁ……馬鹿が僕は。

「人間は決して天国にはいけないのだろうか」

「どうして？」

「生きてる事じたい罪だ。生きるという事は決断していい事では無いのだ。特に人間は」

「だけど……貴方も人間じゃない」

「そうだな。人間だな」

沙希と別れ病室を出てしらみ潰しに現場を回った後、誰かにつけられている事が分かった。

ソイツはただ単に僕とすれ違った時に方向転換して後をつけてきた。

すると目的は何だろうかと先程から危惧しているのだが、僕は至って普通の一般人で、相手の行動など読める筈もなく、だからと言って付きまとわれるのも不気味と言えれば不気味である。

そろそろ日も暮れようかという時にこれだから自分の不幸を恨む他ないが、それにしただってソイツはよくもまあ一定の距離を置いて追いかけてくるなと感心すら覚える。

近づき過ぎず離れ過ぎず。

絶対に人間六人分開けて奴はついて来ていた。
逃避するにしてもこの距離じゃ追いつけられるし、かと言って逃げ回るのも趣味じゃない。

顔ぐらい見てみたい物だが……さてさてどうしたものかな。
後ろを振り返ればやはり逃げるのだろうか？

いや隠れるだけか？

じゃあ隠れられない所というところであろう？

この大きな大都市で隠れる場所が無い場所を探す方が難しい。
やはりどこか店に入るべきか？

いや、入ったとして奴は付いて来るのだろうか？

しかしだ。

顔を見てみたい気もする。

どんな奴が、何の目的があつて僕を付け回すのか？

そもそも、付け回される事をした覚えなどさらさら無いのだが
とするとやはり事件を調べ回っているからだろうか？

いや、それだと妙だ。

何の理由があるのだろうか？

じゃあ関係者か？

関係者が何故僕を付け回す？ そんな回りくどい事などせずに警

察に行くだろう？

じゃあ何者だ？

何の理由があるのだろうか？

一か八かかな？

大通りに面している寂れた喫茶店に入ると、マスターが一瞥をくれただけで何も他には喋らない愛想のない店だった。

店内に客が二人ほど居たが気にも止めない様子で、新聞を読んでいる。

僕は一番端のソファに掛けのテーブルに座ると、コーヒーを頼んでそこで待つ。

入ってくるだろうか？

やはり外で待つだろうか？

そうこうしてる内に、店内のベルが小さく鳴った。

ソイツは迷わずこちらに来ると目の前に腰を下ろした。

奇怪な奴だった。

首に黒い首輪を巻いて、手首には鎖の千切れた手錠。腰まである髪は血液を連想させるような赤い髪をしていて、どこことなく薄い笑みを浮かべている。

服はパンクバンドを連想させる千切れた服を何枚も着込んでいたが、スカートはめちやくちや短かった。

肩にはギターケースなのかベースなのか分からないケースを担いでいて、そのケースには無数のステッカーが沢山貼ってあった。

彼女は笑いながらコーヒートを頼むと、音楽を奏でるようなアルト声で

「始めましてこんばんは。切り裂きと申します」

愛想笑いでそう言った。

第四章：黒子は夜に消えて

世界は浅い。

広くもなければ狭くもない。

ただ平坦とした日常がそこにあってそれを浅いと言わずに何と
いうのだろうか？

世界は浅くて狭くて……だけど、かと言って初めから限界などは
存在せずだからこの世界に悲観する。

絶望し、落胆し、居もしない神を恨む。

人生を面白く生きて来た奴は未来も面白いなどと、嘔吐くがその
先に何かあるのかさえ理解出来なければそれはやはり楽しくは無く
て、誰が自分の未来を明るく照らしているなどと予知など出来るの
だろうか？

躓いて立ち上がれない人間など何処にでも居るではないか。

未来など一切分からない事が不安で、恐怖で一番恐ろしい物だ。

怖いというならまさに恐ろしい存在である。

明日がまた来るなど誰が思えるだろう。

明日は昨日かも知れないじゃないか。

永遠に続く無限ループかも知れない。

何百、何千、何万、何億と同じ人生を繰り返しているのだとした
らそれはまた不幸であり、恐怖だ。

死んだ後も同じ人生など一回で真つ平なのだ。

蟲であれ、動物であれ、人間であれ全て同じである。

その先に希望など見いだせる筈がない。

唯一の救いと言えば記憶がない事だろう。

人はいつか死ぬ。

面白くは無い　話だけど。

快晴にして暗澹たる曇り空だった。

雨の日にだってこんな憂鬱な気持ちにはならなかっただろうに。
今の僕は死刑囚の順番待ちみたいな物だ。

どうにもこうにもツイていない。

いや、逆にいっぱい憑いてるのかもしれない。

先ほど、自称切り裂きの女に死刑宣告されたのだから、日本という国の行き先を不安にさせる事この上ない。

自称切り裂きは切り裂きらしい。

もちろん、人を殺して生きる。

それは“そうある事”なのだから何も言つつもりもサラサラ無いが、三人殺した後、殺しますんでと愛想笑いで言われたらどうしようも無いような気がする。

何か勘に触ったような事したのかと聞いたら、無いと答えられたのもまた救いようが無いのだが……

ただ三人後というのがまだ救いかもしれない。

彼女にとっても18人という節目なんだそうだが、節目と言えば20人じゃないのかなと思ったのだけれど、彼女にとっては18人が節目らしい。

はつきり言えばどうでもいい。

殺人をする人間の思考回路は僕にはあまり分からない。

まあ、そんな事を知る事よりも知らない方がマシなのかも知れないな。

判るより判らない方がいい。

無知という名の存在は時として知らない方がいい事もある。無駄に知識を詰め込むと人はそれを正価値として見て、相手の意見を素直に聞けなくなる。

それならば幾らか知らない方がいい。

自分の家に帰って来た僕は、ベットの上に倒れこみながらあれ

これと考えていたかどう考えた所で、それは堂々巡りにしかなからなかった。僕が思考する事を諦め、人生を諦め、晩飯も諦めた。飯を買うのを忘れてしまったのだ。

冷蔵庫には何故かビールしか置いてなくて、僕は落胆する。

こんな事なら切り裂きと行った喫茶店でサンドイッチでも食べておけば良かった。

自然に溜め息が出た。

最近よく溜め息を吐く回数が段々と増えてきたように思う。

それはやはり、僕が一步一步確実に、大人へと近づいているからだろうか？

それは少しだけ寂しい気もするがそれが大人になるという事なのかも知れないな……

面白くはない話だけど。

さてどうしますか？ お腹は結構空いているのだけど、買いに行くのも億劫といえは億劫だ。

人間、水だけでどれだけ生きられるのかというのも、実行したいといえは実行したいが身にもならないと3秒で思い込み辞めた。

ピンポン

何だろうな。なんでこういう展開っていつも人が来るんだろうな

……

しかもそういう時に限って大変な奴なんだよな。

新聞屋の集金とかじゃなくてさ、何かこう呼んでもないのに遊びに来た友達　みたいな感じ？

嘆息吐いた後にインターホンを取ってみる。

「はい？　新聞屋なら喜んで」

「あ、すみません、切り裂きです」

「帰ってください。と言うかほんとにマジで帰ってください」

今日会ったばかりの人間に今日殺されるってっか？　何のギャ

グだ。

レオンも真っ青だろそれじゃあ。

「いえ。あの。言いにくいんですけど……今日だけ泊めてくれませんか？」

「本当に帰ってくれ。何したんだお前は……っつかお前もう切り裂きなんな！ 切り裂きといえばだな沈着冷静。残酷なる死神の代名詞みたいなものになんで家無いんだよ……」

「家賃3ヶ月滞納しちゃって」

「聞いてねーよ。むしろ切り裂く前に働け」

「死活問題なんです」

「人殺しという言う台詞かっ！」

「まだ18人じゃないですか」

「僕、殺す気満々じゃねかつ！」

「……まだ、17人じゃないですか」

「減ってる！ て言うかマジで殺す気」

「いやまあ……泊まらしてくれるんなら考えます」

「うん。明らかに殺す気満々だよな」

「お願いします！ タ・ゲット変えますから」

「そんな単純にか！」

「美少女ですよ？ 可愛い女の子ですよ？ いや寧ろ美しい女性ですよ？ あんな事やこんな事が出来るかも知れないんですよ？ し

かも切り裂きですよ？」

「最後が無ければ泊めてやるんだがな」

「美少女ですよ？ 可愛い女の子ですよ？ いや寧ろ美しい女性で

ですよ？ あんな事やこんな事が出来るかも知れないんですよ？」

「何いい直してんだよ」

「寧ろそんな簡単に、捨てていいのかよ。切り裂き

「所詮、抱くだけ抱いて飽きたら捨てるというのね」

「寧ろ、その想像力に脱帽だわ」

「そんなにあの女がいいのね！」

「お前よりはマシだと思うが？」

「つうか何なのよこの女は……」

「お願いしますっう」

「野宿しろよ。お前なら大丈夫だろ」

「女の子に野宿させる気ですか！ 外には一杯、性欲を持て余した狼が私の体を舐め」

ガチャリ。

インターホン置いてみた。

「どうか付き合いきれん。」

ピンポン ピンポン ピンポン ピンポン
ピンポン ピンポン ピンポン ピンポン
ピンポン ピンポン ピンポン ピンポン

「どんな連打!？」

「高橋名人も私の前では裸足で逃げ出します」

「どんなシューティングマニアだ」

「シューティングを馬鹿にしましたねっ！ どの音楽も神だということにあなたは馬鹿にするんですね！ 近頃のRPGときたら、画質を綺麗にするばかりで音楽やストーリーを疎かにしすぎています」

「ああ、それは分からんでもないかな」

「特に蜂は最強過ぎます」

「ストーリーといい音楽といいな、しかもあの万人向けじゃないのがまたなんとも言えん」

「分かりますっうっう、やはりゲームは万人向けを作るべきじゃ無いんですよ。人により色々いいものをつ！」

不意に会話が止まる。

受話器越しに小さく息遣いだけが聞こえてくる。

「どうした？」

何も答えない。

「おい？」

「ちよつと質問ですが……隣、人すんでました？」

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「いいから答えてください」

「だからなんで？」

腹の置くから声を出すようにして彼女は言う。

「私はこれでも切り裂きと呼ばれています。だから音には敏感なんですよ……」

「だから？」

「隣の部屋に誰か居ますよ？」

「そりゃ居るだろ……隣、人居るんだか」

隣人なんていたっけ？

スーと目線が流されるように後ろを捉える。

黒。

初めの感想はそんな感じ。

黒一色でどこか黒子を思い出させる。

そんな生易しいもんじゃないかもしれないな。

空間が黒なんだ。

歪んでいるような、絵の具を撒き散らしたようなそんな間感じ。

黒とか青とか紫とかそんなものを撒き散らしたような感じ。

顔は黒子の布で隠してある。

というか全部黒子の服装だ。

黒い足袋。黒いティシャツ。黒いズボン。黒い……肌

吐き気がする。

人間のようで人間じゃないもの。

人であり人で無いもの。

考え方の違いか、それとも人として何か……根本的に違うのか。それすらも分からない。

人間であり、人間じゃなくなった者。

勝己はなんていうだろう？

イレギュラーかな？ 規定外？ 人外？ どれも違うな。

多分、『化け者』だな。

瞬間的に化け者が動く。

音も無く無音で動く。

人間という人間という人間に出来る芸当ではない筈。

感想を漏らす前に頭ごとフロアリングの床に叩きつけられた。

視界が一瞬にして反転し、集点が定まらない。

視界がぶれる。脳信号がハッキリと遅れない。声すら出ない。

痛い。

何の恨みがあるのかね。波風立てずに生きてきたつもりだったんだが。どうにもこうにも、誰か傷つけてるらしいね。

髪を掴まれたまま、何度も何度も床へと叩きつけられる。

それほど酷い事したか？ と見当違いな事を必死で考えてはみたものの、それはこちらの人間にしか通用しないのであって、あちら側の人間には通用しないのが道理なんだなと思う。

嫌なもんだと結論づけてから流石に病院いかないと死ぬなど本気で考えた。

頭は切れ、唇は真っ赤に染まり、鼻は多分折れてるかな？ そんな結論が出た時に化け者の攻撃が止まる。

しかし髪は掴まれたままだ。という事はどついう事だ？

1・切り裂きが来た

2・そいつが凄いい形相で。

3・化け者の腕を切り落とした。

さあ、どれ？

「あまり、汚い手で触らないでくれますかね？ 私の泊まる所無くなっちゃうんでどうか義手ですか。自分の手を汚すのがそんなに嫌なら、殺人なんかしなきゃいいのに……」

笑顔で切り裂きは言う。それが当たり前なのだろう。そういえば切り裂きの本名聞いてなかったな。

「三下」

三下といわれてキレたのかは分からないが、切り裂き目掛けて

化け者は跳躍する。

「ただ切り裂きは嘆息する。吐き捨てるように。つまらなそうに
呟いた。」

「18人だったんだけどなあ」

トスンと意図も簡単に楽勝とでもいうように喉にナイフを突き立
てて、あっさりと人を殺した。虫でも潰すようにして。

「面白くないなあ」 喉からナイフを引き抜きぬいて独語した後に
嘆息した。

「大丈夫ですか？」

「地獄直行みたいな感じ？」

「天国でしょ……行くのは」

「そう思いたいかな。つうかよく開けたなドア」

「ピッキングぐらい造作も無いですよ」

「じゃあ初めから、殺されてた訳ね」

「そうなりますが……まあシューティングやってましたから気が変
わりました」

「なんで？」

「ただでさえシューティング人口は少ないですから」

そんな理由で僕は助かった訳か……今度からマジでシューティン
グは買い続けれないといかん。

切り裂きは僕から顔を背けると、死体へと目をやる。

「顔見えますか？」

「だな」

うつ伏せの死体を足で転がすと見知らぬ男がそこに居た。

「……知った顔ですか？」

「いや、知らないん」

見たこともすれ違った事も無い。

「じゃあ何者でしょうね？」

「ただ一ついえる事は、僕が邪魔だって事だな」

「何ですか？ 寧ろ生きてても害はなさそうな人間ですが」

「なんでだろうね？ 僕が聞きたい。まあその前に救急車呼んでく

れ……流石に本当に死にそうだ」

「泊まらしてくれませんか？」

「病室になるけど……それでよければ」

「はい！！」

何で満面の笑顔なのか教えて欲しいところだった。

第五章・或いはその両方か

面白くない

面白く

ない
面

白くない

o mos i r o k u n n a i

o m o s

面白

i r o k u n n a i

面白く

s i n n j a e

くない。

寒い

o w a i

怖い

おもしろ

死んじゃえばいいんだ

くない。

寒い

面白く

ない。

面白くない

怖い

寒い

面

白

わ

みんな死んじゃえばいいんだ！

こ

寒い

い

じ

や

えばいいんだ

おもしろ

くない。

面白くない。

怖い

オモシ

ロクナ

イ。

面白くない。

おもしろくな

い！！

オモシ

怖い

ロクナ

sinnjaebaiinnnda

こわい

イ。

面白くない。

面白くない。

おもしろくない！！

私が壊れる……

空と雲と闇と世界と地上と原因と結果はニーチエのいう通り糞みたいな重い気持ちに僕にぶつける。

「どうも相変わらず鬱の僕です。」

最近、入院しました。僕としては修復師の仕事を休んでまここに居たくは無いんだけど、切り裂き曰わく『死ぬよ?』と真面目な顔して言われた日には僕としてはどうしようも無い訳で、そんな事言われたら、赤子も裸で逃げ出して油ゼミ捕まえて戻ってくるぐらいの勢いで土下座して僕は今入院しています。

全く以て面白く無いです。入院生活じゃない。なぜ隣に切り裂きがいるのかを教えてほしいんだ。

「はい、あーんして」

「お前とりあえず家帰れ、そっから話しような」

なぜお前が見舞い品を食べているのかとか、なぜお前が人の食事を穫るのかとか、なぜお前が入院患者でもないのにここで寝泊まりしているのかとかそんな事はひとまず置いてくとしても、なぜお前がここで僕に『あーん』などというバカツプル丸出しの片割れみたいな事しなくちゃならないのか文字数20文字以内で教えてくれ。

「暇だからあなたの相手をしてやるうと思って」

「見事なお手前で」

「いやいや、あんたが私の事好きだって事ぐらい私がよくしてるから」

「そんなお前はどこの火星人だ」

「ヒューマンノイド星からやってきましたゆーこりんです」

「コリン星じゃないのかっ!! つうかどこの廃盤決まったハードだよ」

「あの世界観は最高だと思います」

「いや判らんでも無いがな……」

病室で話すオタク会話を延々と繰り返しながらこいつは此処に当たり前の様にしてここに居る訳だけど、誰がファイナルと名のつくゲームの地名しりとりなんかしなきゃならないのかその辺からまず教えてほしいよ。

あそこでゴールドソーサーなんか出すんじゃないかな？ たなとか悔やむ僕も僕だけどさ。

「暇」

「その一文字で僕にどうしろと？」

「人文字は案外と難しいんだよ？ 右腕が特に折りにくくてさ」

「誰がんな事聞いた」

「顔文字とかもね、顔に切り傷を何力所もつけなくちゃならないし」

「顔文字ってそっち？ ガクガクガクガク () () 。 ∴ 。 () () ()」

「ガクガクブルブル こんなんじゃないか！」

「小説にそれはタブーって知ってた？」

「ありきたりな事して、小説書きたいとは思わないとおもっよ？」

「それは誰にいつてんの？」

「さー？ わかんねえ？ 俺じゃないから今なの」

「あんたじゃないのっ！！」

「まあ置いとくとしてだ……何でずっといるんだよ」

「いつちやだめのの？」

「誰がそんな上目づかいで俺を見るといった。あと媚びるな」

媚びたら僕がころっというちまう。

「だって泊めてくれるっていったじゃんか」

「それはそうだけどな……二週間以上も泊めるとはいつてないと思っが？」

二週間。僕は二週間、勝己とは会っていない。

運ばれた時は意識不明の重体だったと聞いている。止血がうまくなかったら僕は死んでいたらしい。

だけど生きている人間に死ぬ直前までいってリターンして戻ってきたと言われても実感なんてわく訳じゃなく、かといってそれでも

切り裂きには助けてもらった恩はあるわけで、だからうるさくは言わないまでも、犯罪者がここにいるというのは何とというか……いやな感じがするわけで。

「心配する必要は無いと思うよ？ あんたが危惧することなんてないし、多分捕まらないし」

「なんで？」

「今回、私関わってないもん」

ん？ どういう事だろ？

「どういうこと？」

「私が担当するのは殺し専門。マジックじゃない。確かに一気に二人殺した事はあっても、二人同時刻には殺せない。その理由がない」「人を理由なく殺そうとしたくせにか」

「それとこれとは話が別。あんたは気にいらなかっただけ。そもそも、同じ時刻同じ場所同じ死に方って人間にできる芸当だと思う？」

マインドコントロールとか、自己催眠とか、手引き、罫……

「考えたところで何も出ないよ。そんなのできっこないんだから。」

人間は唯一として考えて行動出来る動物だからね。まあほかの動物も色々考えてるかもしれないけど……この場合と仮定して。その中で怪しい場所。特に殺し自殺何でもいい。そんな場所に行きたいと思う？ 私なら思わない。肝試しは昔墓地だったから、昔ここで人が死んだからという過去だから行ける芸当であって、そんな場所に好きこのんで行くやつはどこかおかしいんだよ」

「ん？ その話矛盾してる、だって人間なら近づかないんだろ？ なら」

「人間じゃないっていったらどうする？ 好奇心とかそんな物なくした人間。たとえば死にたがり。たとえば狂った人。人間として大切な感情を失った何か。それは人なんて言わない。人に似せた人じゃない化け物。或いはその両方」

人では無い何か。人であり人じゃなくなった何か。その本質。そ

の理想。その願望。生きる屍。トワイライト。幻想に生きたその価値。

「して、切り裂きさんはそこで何を見る？」

「私？ 初めて聞かれたよ」

「そうなのか？」

「ずっと一人だったしね。それにこうして悩む前に行動してたし」
行動？ 人を殺してたというイミだろうか？

「だから、この考えは本当かどうか判らないんだけど、女の感として物を言うなら……私と同じ臭いがするんだよ。当たり前という感じで人を殺す事とか、多分、まったく同じ目をしてるんじゃないかな？ たぶんだけど。人間殺したらどうなるとかいちいち考える人間だと思うよ？ それと完璧なる潔癖症」

「なんでそんなことまでわかんだよ？」

「自分からきてないからね。人を殺す理由は大体、変に察しがいい奴か、変に人に恨まれる奴かどっちかだよ。でも自分の手は汚さない。二週間前がいい証拠だよ」

自分の手を汚さない人間ね。そんな人間いるのかな？

「いるよ？ 金持ちとか特に」

「一度いっておきたかったんだが、何で僕の考える事判るんだ？」

「顔に出るからねあんたは」

そういうと、切り裂きは席を立ち首を二回ほど回した後、散歩といつて病室を出て行った。

一気に病室が寂しくなる。なんか友達が帰ったあとの家に似てる。少しだけ寂しい。

窓の外には相変わらず、蝉がじりじりと喉がかれるまで歌っていて、その分だけ命を削って彼女らは何を夢見るのだろうか？

一週間の命だというのに。

さて、そろそろ解決に向かわなきゃならないんだが、いまいち相手が何を考えているか判らん。

そもそも証拠というのが無い。というか犯人像すらつかめん。探

偵とかいたらいいんだが。そんなご都合主義いないな。

だからといって情報収集というのな。いや情報が無かったら何も発達はしないいな。

あーどうしよう。めんどいな。いやめんどいというより会いたくないな。

だけどなあ。その辺の情報聞いていても問題はないだろうが。等価なんだよな……。

「はあ」

春日井さんが僕を雇ったのには理由がある。

コネだ。簡単に言つとリークする人間が半端ないという理由からだ。

春日井さん。僕。引きこもり。という三人である会社は成り立っている。

その引きこもりに春日井さんを紹介してもらったのだ。

「はあ」

ため息というのは底なしに出るモンだ。

携帯は使用禁止だったかなたしか？

んーまいつか。

隣に置いてある携帯を取り、リダイヤル。ノーコールであいては出る。

「株に一番大切な事って知ってる？」

「そんな嫌みをいうからお前は嫌いだ」

「どう考えても遅い。お前は人がいいんだから人脈フル活用したらいいんだよ」

「それだとしても、等価はとるんだろ？」

「生写真だな」

これだから引きこもりは嫌いだ。というかこいつが嫌いだ。

「……だれの？」

「切り裂きの」

「お前なんですってんだよ」

「引きこもりだからねー」

全然関係ねー。

「その分情報は教えるよ。さてどうする？」

「つか毎度思うんだが、その生写真どうしてんだよ」

「眺める」

「うわー変態だー」。

「とりあえず、一言だけいっとくとその写真はそれっきりだから、別に変な事に使わないから」

「誰も聞いてネーよ」

「いや、絶対に信じないと思うから」

「信じないどころか……おまえ女だろっつに」

「まあそうなんだけど。で聞く？ 情報？ 色々面白いことしれるよ？」

「そういうところが嫌いなんだよ。魔法使いが」

「魔法は使えないけどね」

第五章・或いはその両方か（後書き）

冒頭色々おかしいですが仕様です

第六章：あさひゆめびし酔いもせず（い）

「一つだけ条件ある」

「条件……ですか？」

「止めておけ」

「は？」

「その笑顔は止めておけ（ソの笑ガオは止めてオケ）」

壊れたままのインターホン。

取れ掛けたドアノブ。

郵便受けに大量に入ったまま放置された新聞

エレベーターの前に貼られた故障中の紙切れ。

廊下に人気は無く、それ故にこの場所に人などいないだろうという錯覚すら覚える。

しかし、ここにはちゃんと人は住んでおり、そのために僕はこうして、こんな辺境の地まで足を延ばしているのだろう。

「……………憂鬱。いや陰鬱かな？」

憂鬱など口に出した所で、現状は何も変わらない。それどころか、こんな場所に好き好んで住む人間といえれば決まって、変人が狂人が愛人ぐらいな物だろう。

所詮は言葉遊び何だからうけど。

相変わらず変わった人間だと思うが、それにしただってこんな場所に住む必要も無いだろうと僕は思う。

いや、実際頭では思っけていても、心の底ではそんな事、微塵も思っけていないのかも知れないが。

思う事と口に出す事は同意語だ。

その先に両方に本質という物は存在しない。存在するのはそこにあると思う人間の悲観的観測及び客観的同情心である。

そこまで考えて僕は思考を辞めた。

多分、その先に結果など出ないからだ。

どちらにせよそれは主観の問題で人により様々な見解をもたらすからだ。

ならばその思考をパターン化するならば何百通りの一部にしか過ぎない。

その一部を導き出した所で、その解答は100中4点という事になる。

ならばそれは意味の無い事。

悔しいが世界の疑問を得るだけの知識や思考を僕は持っていない。

ニーチェがそうであるように哲学を語る上で必要な物は、その物事を見定める目と知識と狂心だ。

それがあって初めて学者は哲学者となる。

僕はニーチェよりもゲーテの方が好きだが。

そんな意味の無い思考をとり止めて、僕は金属とペンキと不純物で出来たドアを三回叩いた。

返事は決まって無い。寧ろ返事する方が僕にとって恐怖だ。

念の為もう一度ノックしてみる。

やはり 返事は無い。

「……ただの屍のようだ」

某RPG風に言ってみた所で遊び人が隊列組んでカジノとか連れて行ってくれる筈もなく、程なくしてメダパニは必要なのかどうかと考え出したが、やはりそれも結論など出る筈も無く諦めた。

多分、使う人は使うのだろう。

けども無駄にMP食うんだよなアレ。

「おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」

その台詞と共に扉が開かれ、半分眠たそうな表情の女が車椅子を器用に動かしながら、パジャマ姿で僕を見下したように眺めていた。

「じゃあ王様が行って下さい。誕生日の日に旅がしたいとは思いません」

「……いや、そこは普通に行こうよ。RPGの意味無いし」

「薬草一つくれない王様の言う事なんて聞きたくありません。寧ろこんな世界滅べばいいと思います」

「ぶつちやけたッ！ 勇者ぶつちやけちゃった!!」

「というかそもそもダーマ神殿なんてハローワークじゃねえか。転職しすぎだつづの。農民を少しは見習えつづの」

「RPGの世界観否定しちゃった!!」

という風な会話を交わしながらとりあえず話が進まないの、ここで終わらせる。

「……で？ 何でまた此処に来いと？ 周りくどい手使いやがって」

女は肩を少しだけ上に動かした後、見定めるように僕を見る。

「少し痩せた？」

「三キロ太った」

「嫌みな野郎め。ボクの話ぐらいは素直に聞いてもいいものだろうに」

「お前の話だからひねくれて聞くんだよ」

引きこもりである彼女 裏話 闇夕（勿論、偽名）は楽しそうに笑むと僕を部屋の中へと通した。

中は相変わらず電気ケーブルとLANコードの束が、大量に壁や天井を這っていて、女の子らしい道具は何一つ見当たらない。

仕方が無いのだろう。

彼女には両足の膨らみは無い。

それと頭がおかしい。

いや、「冗談抜きで。」

「何か飲む？ と言ってもコーラとペプシとラムネしか無いけど……」

「炭酸ばっかりッ!!」

「炭酸は体にいいんだよ？ 頭がシュワァーとして、それからゴワ

ア　として、ついでに又ア　つてなるんだよ」

「もう火星に帰れ……………な？」

「何！　その同情ツ！？」

「寧ろ冥王星に帰れ」

「火星人も無かつたんだ！」

「まあ……………流石に宇宙人と延々と話しててもいいんだが。いい加減話進めたいんだが」

「もうま、とめ、られちゃった……………」

「何俯いて、犯されちゃったみたいない健気な子演出してんだッ！」

「やっぱり、そんな女の子が趣味か……………」

「誰もナ事言つてねえええええ」

軽くねえええええがNEEEEになりかけた所で話を戻す。

こんな事している暇は無いし、こんな事している時間も空間も無いのだ。

いや、空間は関係無いか。

所詮は平行世界の話なんだし。

「で、お前の情報……………」を」

なぜか物欲しそうにして手を出す闇夕

「何？」

「写真」

あ、やっぱり渡さなきゃならないのか……………」

「何でそんなに写真が必要何だよ」

「魔法使いが鍋に何入れてるか教えてくれる童話が今まであった？」

魔法使いが魔法を使えないのと魔法使いが魔法を遣えないのではまた違う。活字と活字の違いと魔法が真宝というように意味と位置と利害で大きく変わるのをお前は考えた事があるか？」

ありや……………ありやありやありや。

「人間が識別出来る物なんてたかがしれてるし、それに伴い価値も上智も平地だつて見る人によればそれは価値の無い物だろ？　世界をセカイというのはとセカイを世界（周り）というのではまた違う。

そこに意味は存在しないし、そこに価値も自我も感覚も存在しない。唯一あるのはそこに何がありそこに何も無いと思える人間の感覚だけであり、そんな物の為に我々は世界をセカイと定義して、この倭小な殻とガランドウな入れ物の中に存在するだけだ。

ならば自分などという存在は世界のたち位置及び客観的見解性及び自我の飽和に値する。そこに定義も底辺も或いは天井もありはしない。それはただ単純に“そこ”という位置に初めからあり、それ故に人は不幸とか幸せとかを決めつける。

そこに何の意味と位置がある。

それこそ意味のない飽和し沈殿した人間という糞忌々しい感情と論理と理由であり、そこを幸せだと思わない奴に何の……何の……意味がある」

はあ……スイッチが入っちまったか。

「論理は判るさ。言いたい事もな。だからそう自分に悲観するな……な？ お前は生きていていいんだから。おかしい事なんて何一つ無いさ」

冷蔵庫からコーラ缶二本取り出して、一本を放り投げた。

「別にお前を責めて無いし、世界なんて自分行ける場所で精一杯だ。だから、その……あれだ。深く考える必要は無いし、深く落ち込む必要も無いんだって」

だからコイツと会うのは嫌いだ。

なぜ僕がコイツを慰めなきゃならんのだ。確かに色々あったよ。

色々あったけど 思い出したくは無い。

「ごめん。ちよっと入ってた」

「仕方ないさ 色々あるだろうさお前も」

優しい言葉をかける事は人生最大の汚点である。と言った人物は誰だったか。

そんな歴史上の人物を思考しながら、僕はコーラのタブを開けて、コーラを飲み干した。

「結局の所、お前はまだ人間が嫌いなんだな。人嫌いじゃなくて人

間嫌いか……」

「……うん」

「仕方ない のかも知れないな」

呟いてみた所でその意味は意味を為さない。それは僕が一番よく知っている。

そのの意味も一番よく知っている。

結局の所、闇夕は人間に希望を抱き、逆に人間に失望した人物である。

僕とは似て非なる存在だ。

僕は初めから人間嫌いの人嫌いだったから。

闇夕よりまだマシな方だ。

「お前はまだいい方さ」

小さく呟いてみた。闇夕に聞こえないよう小さくそれでいて優しく呟いてみた。

「そうだね 相変わらず君は優しいね」

「止めとけ。お前が壊れる。僕は優しくは無いさ。優しく見せてるだけだから」

そう見せているだけだ。その先に何も無い。優しさという善意だけ。偽善に良く似た優しさは優しいもは言わない。

優しいのは心の水が溢れてる奴だけ。

僕の場合、心の水はとうに枯れてしまった。

「そうだな。いい人は元々いい人なんだろうと思うよ。心のそこから。多分いい人なんだろうさ」

「そうだね。君は元々壊れてたんだよね」

そうなる。

相づちは心の中で打った。

口に出すのが嫌だったから僕は自分で自分を肯定した。

それは卑怯者の特許であり、それは僕にとって僕という存在意義であると同時にその理由を話すべき時じゃなく、それは僕が倭小であるという存在証明でもあった。

「ヒーローはもういない」

「ヒーローはもういない」

僕の言葉に彼女 闇夕は繰り返す。

「もういないんだよ。ピーターパンもウルトラマンも狼すら逃げたんだよ」

そうそれはお伽話に似た願望。

それはお伽話に似た羨望。

そうそれはお伽話に似た希望

それはお伽話に欲望

小さな小さな耳の種。

咲かすは希望か願望か。

揺れに追い風。嵐に乗って、我は我だて人にいい。

夏の夜空は散らばり消えて、残るあはひ。

あさひゆめびし酔いもせず。

さあ 語ろうか。

第七章：あさひゆめびし酔いもせず（ろ）

『自殺は寿命では無いのか？』

そんな疑問を生まれてこの方この歳まで散々悩みに悩んで、それこそ本当に頭が禿げるくらいまで自問自答した最大の疑問である。ただ結論は結局“それは個人が決める事”という面白くも無い結果に終わった。

自殺という行為は死に方というカテゴリーの中にある行為の一つなのだけ、自殺を選ぶのは個人であつて他人では無いのだから、そこで人生を終わらすのはやはりその人の寿命では無いのかと考えていた。

短い長いは脇に置いとくとして、そもそも寿命とはどんな物だったのか、僕にはいまいち良く判らないでいる。

寿命というのは老衰して死ぬ事が寿命をまっとうしたという事何だろうか？ その辺が酷く曖昧で、酷く抽象的な気がするのだ。

人が事故で死亡する事と人が老衰で寿命をまっとうする事と何処がどう違うのだろうか？ そもそも人は死ぬ事に敏感ではあつても寿命という定義には曖昧で無関心だ。

そう考えると件の自殺という問題である。

そもそも、自殺というのは人生に絶望、或いは逃げ道を失った状態の人間が自殺を試みると思うのだが（この場合、リストカット及び生きる感触が欲しいという理由で自殺する人は除外とする）その場合もやはり、人生をまっとうして生きたのでは無いのかと推測する。

ならば自殺は寿命と言い換えても良いんではないのだろうか？

それともやはり自殺は自殺というカテゴリーでしかなく、そんな概念的感情に何も意味はないのだろうか？

ならばそれは寿命も意味のないことになるんじゃないのだろうか？ というか自殺に対してもそんな概念自体ないのであればそれは

寿命自体意味がない。それすら曖昧だというのに何故自殺を自殺と決め付けられるのだろうか？

それは寿命かも知れないじゃないか。それを何故人は自殺と決め付けるのだろうか？

自殺というのは多数に折り重なった生き方、死に方から一本を選び掴んだ為に自殺と名称されるたのだから、やはり自殺というのは寿命では無いのか。

でもそうするとある種の矛盾も生じる。

それが“他殺も事故もすべてが寿命では無いのか？”というありふれたようで当たり前じゃない答え。

結果なんて誰にも分からないし、結論だって誰にも分からない。それは一種の麻薬見解。

自分が納得すればそれでいいのだとは思っただけど、どれほどの理論武装で固めた所で、哲学はやはり哲学なのだ。

僕には運命とか寿命とかそんな自力見解を得るには些か、知識と世間を知らない。

確かに自己見解しかり自己知識としては、その価値は価値観よりも優位に立つかも知れないが、所存はイカロスの羽根みたいな物だろうと思う。

知識が無ければ何も見いだせやしない。勿論、それが知識なのかどうかは別としても、知識が無ければ何も描けないし、思考は必ず壁に当たる。

ただ僕の場合は知識自体存在のだからこれは自己満足の自己見解だ。考える事はある意味苦痛にしか過ぎない。

簡単な事を考えるのならば簡潔に　　が理想なのだけれど、簡潔に伝えたとしても相手にそれが100%伝わらなければ、それはただの戯れ言にしか過ぎない。

所詮、これは理想であり理想という名の幻想である。

人に物事を語る時には、自分を通して相手に伝わらなければならぬ。でも、それは結局筋違いもいいところで、誰もその話が正解

だとは思わない。

間違っても無ければ、正解でもない知識は結局は自分の自己満足でしか無いのだ。その後に残るのは嫉妬と侮辱でしか無いのだ。

何も無いなら別にいい。

何も得られないならばそれもいい。

ただ言いたい事はただ一つだけ。

そこに『何が』あるのか。

それが多分救いだ

もしも世間を一般常識とするならば、運命の中に寿命は存在しているのであつて、運命を寿命言い換えるのは難しい。

海を川と言うようなもんだ。

それは少しばかり無理があるし、どう考えても運命を寿命とは言い切れない。

そうなるとやはり、事故や他殺を寿命とは言い切れないのはそれが、他殺であり自殺であるからだ。

でも、運命と言うのは一貫して、個人が産まれて死ぬまでの事を言うのだから、あながち間違いで無い……と思う。

やはり、運命＝世界的になるのだろうか？

それとも、世界＝運命なんだろうか？

万、何億という数の運命から引いたハズレくじみたいなものだ。出店でよくある紐引きといえれば分かりやすいかな？

つまりは寿命＝運命というのは間違いであり、寿命が短い、長いという基準は本人が決められるのでは無いだろうか？

自殺という概念を一つに絞ってみれば、運命というよりもそれは寿命であり、死にたくなつた人間は死んでしまう。

それだけの話では無いだろうか？ いやこの見解はどうなのだろう

うか？

他人がその人の自殺願望を救えるだろうか？

それは論文を書くよりも遥かに難しく、真理を知るよりも簡単だという事だ。

空に憧れれば人間という存在は空から墜ちるのが万人が持つ常識である。

では何故人間は空に憧れるのか？

それは、世界は広いように見えて案外狭いからだと思う。

世界という空間ならば広いが、認識できる範囲は自分が思っているよりもずっと狭い。

せいぜい隣町ぐらいだろうか？

それが人間の持つ最大の弱点であり、人間が脆い部分であると僕は考える。

視野が広い狭いとかじゃなくて、人間の脳に世界は広過ぎるのだ。とつくに許容範囲など越えている。

まあ、脳という気管を全て使っているのなら話は別だろうけど。

だけど人間の脳なんて8%使えたらいい方だ。

結局、人間は無限の可能性というものがあるらしいが、現状でも感じない人間は多分成長自体止まってる。

たかが3世紀前の話だろうに。

それなのに人間は1%も知識として使おうとはしない。

パソコンのハードディスクみたいに二、三年で容量を上げられたら、人間も楽なんだが……人類はそれを拒否するらしい。

でもそれなら脳は記憶デバイスよりも不完全であり未知だという事だ。よくそんな人間がPCなどという人間的デバイスを作った物だと感心する。

人間であり人間を作った訳だからな。

マスターとスレーブとはよく言ったものだと思う。

ジャンパーピンじゃないさ。

パーソナルコンピュータと人間との話だ。

本当にAIという物が完成してAIチップを埋め込んだのならば、やはりPCはパーソナルコンピュータの粋を超えて、それこそ人間と同じ思考を持ち、人間と同じ意味を持つのだろうか？
実際どうなのだろう？

人間を作りたいが為に人形を作ったある人形師がいたが、自分という存在を其処で否定する意味はなんなのだろう？

生きるのに必要なデバイス。

それに包まれたケース的存在な人間を纏う皮。もしもそれが人間ならば人間が人間であるという存在はどうなのだろう？

記憶＝記録である。

人が生きてきた記録。

人が生きてきた記憶。

その二つの違いはやはり、人の記憶に残っているからだろうか？
ならば人がその記憶を人に伝えた時、それは記録になるのでは無いのか？

人と呼べる存在の奥にある無意識に行われているシナプスの電気信号はどの辺りで人間と認めているのだろうか。

そもそも人間を人間と呼べる定義すら世界であれ、政治であれ、子供であれ、その根本的理由が無い哺乳類をどうして人間と呼べるのであるだろうか？

そもそも人間という骨組みを持ったPCという可能性もあるじゃないか。

或いは、その絶対的だと勘違いしている人間は遥かに罪深い生き物だと、何故思わないのか？

人間が一番の最悪である。と言った哲学者は賛美に値する。自分という基盤を持たない人間が人間だと呼ぶのだから、地球の頂点もたかが知れてる。

人間こそ絶滅すべき種だ。

「……以上、暇つぶし終わり」

何か頭のシナプスが何本か焼き切れた感じがする。駄目だなこういうのはどうも苦手だ。

所詮は自己見解の自己満足だ。

何の意味もありやしない。

そもそも言葉という物自体、人には不必要な物だと思う。

それならば人は言葉を喋る前に自己を改善し、周りを傷つける事が無かつたんじゃないかと思うからだ。

まあ、それが本当に言葉だけの問題なのかはさて置きだが。

右手首の時計を見ると午前3時と針が差し示している。今も昔も丑三つ時だな。

これで釘やらハンマーやら蠟燭やらあれば、丑三つ時なんだが今の現代に丑三つ時だろうが何だろうが関係無いからな。

そもそも丑三つ時って何だ？

丑の首が三つだったか？ それとも干支に関係があっただったかな？

「丑三つ時っていうのは、昔は二時間で区切って干支で表してたのよ」

「ふん……でも、そもそも何でも俺が考えてた事判ったの？ つうかそれじゃあ丑の刻じゃねえの？」

白いハーフのコートを着た切り裂きがコンクリートで作られた壁に持たれながら、馬鹿にするように僕を見下ろしている。

「ぶつぶつぶツブツと気持ちが悪い。独り言が多いからねあんた。そもそも友達居ない子かあんたは」

友達なあ……居たかな？

「まあ、あんたの友好関係はさて置いて、そもそも丑三つ時ってい

うのは下刻、上刻で示されていたんだけど、江戸時代に入って数読みっていつのが出てきてね？ 0時を9として2時を8、4時を7、6時を6、8時を5、10時を4としてたのよ。でまた一巡して9から始まる訳」

指を立てて何だか偉そうに語る切り裂き。

「でもその計算なら丑の刻だったつけ、を丑三つ時とは言わないんじゃないか？」

切り裂きはニヤリと口の端を上げて、卑しく笑う。

「人の話は最後まで聞く。だから江戸時代に上刻、中刻、下刻と分けた訳よ。丑の上刻は2時〜2時40分までとかね。丑の中刻なら2時40分〜2時80分とかね。でも待ち合わせとかの時って40分も待つてられないじゃない？ 丑の上刻待ち合わせなとか言われても40分も待たなきゃいけないじゃない？ だからさらにさらに区切った訳。丑一つなら2時〜2時30分。丑二つなら2時30分〜3時。丑三つなら3時〜3時30分。丑四つなら3時30分〜4時って具合にね。だから丑三つ時。3時〜3時30分って事ね。あと、補足として1時半とか2時半ってというのは、数読みの1時とかを指す場合の名残ね。」

9〜4つ数えって教えたでしょ？ あれは2時間ごとにしか数えられないから間の時間を半と読んだの。だから9つ半なら1時って事ね」

誇らしげに胸を張った切り裂きは右手首にぶら下がっていたコンビニ袋からコーヒー缶を僕に投げ渡した。

「ほ〜意外と物知りだなお前は」

「まあ〜ね。あんたと違って学があるから」

誰も中退とか中学卒業とか言っていないんだが。いや、まああまり行つては無かつたけど。ちゃんと卒業した覚えも無いし。

そもそも学校というのが嫌いだつたように思う。所詮は学校という閉鎖空間の中で何故、あれほどまでに好き嫌いや学力を競いあわなければならぬのか僕には分からなかった。

「で？ 何でまたこんな所に私達が来なきゃならないのよ」
確かに正答な理由だと思う。

此処は遙か地下世界より30メートル上にあるマンションの屋上である。

普段ならば誰も踏み込まない場所なのだろうけど、此処が殺人現場ならば話はまた別だと思う。

そう、此処で人が二人同時に死んだという不可解な事件があった。事件と言っても、未だに他殺か自殺か判らないのが本当の所だ。

そもそも前例自体無いのに、同時に何て出来る筈が無いのだ。

どれが正解でどれが不正解なのかも僕には判らないし、そもそも自殺の発端に正解も不正解もあるのかどうかは判らないのだけれど。生きる。死ぬ。考えた所で意味は無いし、所詮はその質問に答えられる奴もいない。

じゃあ何だつて人は殺人を犯し、人を殺すのか？ それが解らなきゃ人は多分、自殺は自殺とするのだろうか？

カテゴリーの不定。

人殺しはいつ人殺しになるのだろうか？

この切り裂きと分類された人間はいつ、人殺しをしたのだろうか？

「何？ 人の顔ジツと見て、気持ち悪い」

「面と向かって気持ち悪いって言われたのは久しぶりだ」

コーヒー缶の残りを飲み干してそう言う。

ゴミの不法投棄は駄目なのだろうか？ ま、誰も見てないしいいか。

空き缶を遠くに投げ捨てる、柵を越えて呆気なく落ちていった。時差が少しあってからカツンと乾いた音がして、それっきり風の音しか聞こえなくなった。

「……本当にこんな夜中に来るのかねえ」

「さあ」

相づちだけは打つ。打たないよりかはマシだろ？ そもそも来ると思って待つより、来ないと思って待つ方が嬉しさは違っただろうに。

その方が楽だ。

人待ちの時とか。人生とか。

「意外と無計画ね」

「計画通りに進んだ事が無いんだよ。特に人待ちの時とか」

「人徳無さそうだもんね」

「まあね」

「人徳というか、人が嫌いなんだよ」何て口が裂けても言わないけれど。

人嫌いか。人間嫌いとはまた違う半端物だな僕は。

嫌な記憶だなまつたく。なまじ記憶力がいいというのも考え物だな。

「誰もが……」

「ん？」

「誰もが人嫌いでしょう……多分」

コーヒーに口を付けながら、虚空を捉えて憂鬱そうに切り裂きは
咳く。

「人間なのにな」

賛同する事も無く、かと言って否定するわけでもない曖昧な回答。
解答ならば良かったんだけどな。「なに？ その曖昧な返答」

コンビニ二袋に手を入れて、何か探しながら日常的に切り裂きは聞
いてくる。

聞くのか質問するのかどちらかにして欲しい。

「人間本体が曖昧だろ」

「何？ 哲学？」

「いや、質問だよ」

多分永遠に続かない螺旋階段。

深い深い闇の奥まで続く思考。

決して光は届かないそんな場所までいけそうな質問。やはり答え
は無いのだけど。

「ガム食べる？」

「それ探してたのかよ」

「要らないのなら別にいいけど？」

「頂きます」

銀紙をはずすと紫色した無駄に薄くて旨い、砂糖と着色料の固まりが姿を表した。

「着色料は使っていませんだって」

「……どう見たって使ってるのバレバレだろ」

口の中に放り込むと、何とも甘い味覚が口の中に広がって気持ち悪い。

「……で？ さっきの続きは？」

「何の話 だったっけ？」

「人間が何故曖昧なのか」

「ああ 人間っていう定義が無いだろ？」

何度か口の中でガムを転がしている切り裂きは、二回程ガムを回した後にやはり判らないのか、眉間に皺を寄せている。

「どういう意味？」

「人間はケースだって思った事無いかな？ 後は人間の基準でもいいや、人間の平均とか」

「何？ 一般的に普通って事？」

「まあ簡単に言えばそうなる」

右手に持ったままにしていた銀紙を広げ、その中に葡萄みtainな味覚騙しの塊を捨てた。

やはり甘いのは苦手だ。

「簡単に……って言われてもなあ」

考えるフリなのかそれとも本当に考えているのかは、判らないけれど切り裂きは先程よりも深く眉間に皺を寄せながら、言葉の意味を丹念に考えている。

「んー多分無いね。人間に不満を持つ前に殺してたし」

「あ、そうなのか」

「うん、まあ胸張って威張れる事じゃないけどね」

気づいた時には人殺してたか。

「そういえば何で人殺しなんて始めたんだ？」

分からなければ本人に聞けとはよく言った物だが、もし故人ならばどうする気だったんだろうな。そもそもこんな質問していいのだろうか？

いや 聞いた所で僕には『軽蔑』すら出来ないのだろう。

「ところでさあ〜」

「何？」

「本当に来んのー？ 無駄に待たされるのは私の趣味じゃ無いんだけど？」

うう寒ウと付け加えた後に、切り裂きは大口を開けて欠伸する。

「石の上にも三年っていうだろ？ それに僕は待たされる事はそんなに嫌いじゃない」

「究極のM野郎って訳？」

「そうかな？ いや、そう言えるかも知れないな」

いつの間にか、服越しにコンクリートの冷たさが伝わって来た。そもそも僕も待つのは嫌いだ。待たされるのは別にいいって思えるだけで。

上から見下ろした街並みは意外と光輝いていて、夏祭りでも行われていたら最高なんだが……

「暇」

「セックスでもする？」

「馬鹿！！ 死んじゃえ！！」

冗談のつもりだったんだけど……そこまで怒る事も無いと思うんだが。

赤い顔してブツブツと何か呟いている切り裂きはさて置いて、さて。どうだろう来るのかな？ いや、出来れば来てくれた方が嬉しいと言えば嬉しいのだけれど……ちょっとだけ不安と言えば不安かな？

すると カツンと何かが錆びた自殺防止の柵に振動を与える。

「来た？」

「ぼいね」

カツン、カツンと柵を揺らしながら、相手は入り口から僕らの方へとわざわざ遠回りしながら歩いてくる。

「やあ」

柵の上を綱渡りのようにして、重力という物に縛られない彼女。

いや彼女と彼。

「今晚でいいかな？　そもそも始めましてかな？　いやいや、どうだろう？　輪廻転生を信じるならば久しぶりになるのかな？　でもまあこの姿で会うのは久しぶりかな？　ね？　勝己」

男でも女でも無い彼は、或いは彼女は微笑みもしないで、僕の名を吐き捨てた。

「やあ、勝己　始めまして」

第七章・あさひゆめびし酔いませず(ろ)(後書き)

もう少しだけお付き合い下さいませ。

い。

それはとてつもなく悲しい。

カラッポなんだね。

そんな事を今更気づいた

事に。

誰がそんな事言った。

君はいまから××××だ。

じ

やあ私は

だ

僕は堪らなく悲しくなった。

一つの体に二つの意志が存在しないように、二つの体に一つの意志は存在しない。

if^{もしも}として一つの体に意志が二つあるとするならば、脳はキャバシテイを超えて何も出来なくなってしまう。

魂というものに遺伝子の有り得ない存在のバックアップがあればそれに越した事は無いが、科学的にしる、非科学的にしる未だに魂

という物の価値は解明されて無いし、もとより魂というのは言語化された奇跡みたいな物なのだ。

だから彼女は奇跡なのだろう。
いや、奇跡だと思う。

だから彼女の体には意識が二つあり、むしろ初めから二つあったのだろう。

それこそ奇跡に近く軌跡には届かないくらい凄い事だった。

そう……だつたって話。所謂過去形である。そんな存在は初めから居ないのかも知れないし居たのかも知れない。僕には詳しくは分からない。それこそ今自分が何者なのかすら分からないのだから。それは許されることでは無いのであろう。そもそも自分がそんなものだと考えた事が無かつたからだ。

僕は此処に生きては生けない人間なのだ。生きると言うことはそもそも過去が有るということ、無い人間は誰が過去を証明してくれるというのだろう？ 僕は此処に生きてはいけない人間だったのだ。誰もが過去というものがアリ、人間はそこに準じる生き物だ。だからかもしれない、僕は産み落とされてから、ちよつとしてまで自分が生きている思ったことは無い。

そもそもこの肉体は死んでいるのだ。それを証明できるのは他でもない。自分自身だ。

「へ？ 勝己？」

切り裂きが信じれないように僕に振り向く。勢いが強すぎて切り裂きの髪がパシツと僕の顔に当たる。

「痛いっつの」

「何でそれを先に言わないのよ！！」

「何でお前が怒るんだよ」

「あー失敗した。ああー失敗した」

切り裂きはクルリと僕に背を向けて、悔しそうになにやらモジモジしてる。

「何があつたんだよ。いじけた子供みたいだぞ」

「うるさい。死ぬ。むしろ豆腐の角に頭ぶつける前に、交通事故で死ぬ」

「『交通事故で死ぬ』だけでいいじゃん」

「うるさい。もういい。ヤンデレになる」

「ツンデレじゃなくてッ！」

「それどういう意味よ」

「いや、カテゴリー的にお前はツンデレだろ」

「死ぬ」

頭を抱えながら切り裂きは唸りながら沈んでいる。

沈黙のまま納得がいったのか切り裂きは立ち上がる。

「よし！ まあなんとなく分かった。あんたは勝己なのね？」

何が分かったのだろうか？

「まああちらさんも勝己なんだがな」

「へ？」

いきなり顔を上げる切り裂き。

そこに居るのは錆びた柵の上に座りながら、体を揺らし今の今まで猫みたいな目を細めてこちらを見ている女。

「うー？」

なんか可愛く首を捻る切り裂き。

猫ア クって感じかな？

「あれだ。気にすんな」

「なんでよー私だけ知らないのは卑怯だ」

「俺も正確にはわかってねーんだよ」

「あ、そうなの？ 同じ名前とかじゃなくて？」

「そういう風にとらえてくれたらいい」

カシヤンと音を立てて降りてくる沙希。

「そういう言い方はよくないな！。僕だって来たくてきたわけじゃないんだ」

トコトコと擬音が似合いそうな足取りで此方に向かってくる沙希。つまりは、勝己は私のお兄ちゃんであり、彼氏であり、半身であ

り、敵なんだよ」

敵という言葉を聴いて、ピクツと肩が上がる切り裂き。

「つまりは、交わらなかつた半身。名前が無い彼におにいちゃんが渡した名前。でありながら私の敵なんだよ」

「それってどういう事？」

刺すような睨みを利かせる切り裂き。

「その通りだよ。はじめから名前なんて無かつたんだよ僕には。そもそも人間として欠落しててさ。過去なんてものがないんだ。それだけだつたらまだ希望をもてただけど、どうもぼくは生きるという事に執着しなくてさ。おかしな話さ。だから僕は勝己なんだ」

「だから……どういうこと？」

拗ねるように切り裂きはそういう。

「勝己は彼だけを示す名前じゃない。私であり、彼であり、その他なんだよ」

「じゃあ勝己って……」

「二年前に死んでる。沙希がそれを認めないだけだ」

死んでいる。そう勝己は二年前にちゃんと死んでいる。

「死んでないよ。勝己はちゃんと生きている」

あつけらかんとおかしな事など何一つ言っていないとでも言うように、沙希はそう言う。

なぜそれが、間違いだと思わないのだろうか？ 死んでいると認めていないという事は、沙希には何かしらその確証があるとでもいうのだろうか？ いや、人が死んで認められないという事はありえないんだ。確かに拒否することは可能かも知れないが、認めないという事は初めから認識していないという事なんだから。

「認識はしてるよ。脳みそも正常。脈拍。血圧。心音。血液。体温。すべて正常だよ？ まあ血液だけはA B - だから普通とは言えないけどさ」

笑って彼女はそういう。その表情しか知らない子供みたいに……
彼女は笑う。

「そもそも正常なんて誰が決めるんだろうね？ だってさもし隣に住んでた順風満帆そうに見えた家庭が次の日には惨殺されてるかもしれないんだよ？ その犯人が親だったりしたら尚の事面白いよね。そうすると周りは決まって『まじめそうな人』というフレーズをつかって、真剣な顔を作って陳腐な事を言うんだよ？ 爆笑だと思わない？」

肩を震わせ、沙希は忍ぶように笑む。

「なにが言いたい？」

「人には誰もが殺人衝動があるという事さ。そもそも人間は動物から進化物なんだから人を殺して生きるのは本能と一緒にだと言っただから人が人を殺すという事はそんなに悪い行為じゃないという事さ。誰だって殺人衝動はあるよ。そこに何をどこまで耐えるのかという事だよ。人間なんてそんなものさ」

「相変わらず悲観した人間だな」

「悲観なんて見方によっちゃ楽観主義よりよっぽどリアルさ」

「甘ったれた独裁者が言いそうな台詞だな」

「陳腐な台詞よりはマシさ」

「ああああああウザッタイ。結局あんたなんなの？ さっきからなんか哲学みたいな訳分かんないこといつてるけど、あんたがとりあえず、この莫迦殺そうとした張本人ってことでいいの？」

先ほどまでうなっていた切り裂きがガヴァーと立ち上がったと思うと、沙希を見ながら額に皺を寄せてズカズカと詰め寄っている。

「まあそうなる。でも体本人は違うから、どうなんだろうね？ 沙希になるのかな？ いやしかし意識は僕だからね。僕の意識を保つたまま、沙希が殺したといったほうがいいのかもしれない」

楽しそうな玩具でも見つけたように沙希は笑いながら切り裂きを見たと思うとニヤニヤと笑む。

そこにムカついたんだろうな。切り裂きは歯をギリツと噛んだ後、詰め寄るように一足で沙希に詰め寄った。

「その余裕たっぷりの笑みがムカつくんだよ」

刃渡り十センチのサバイバルナイフの切っ先を沙希の喉元にもって行きながら、沙希を威嚇する。

「おお怖い。人間の域を超えてるあたりが規格外というところかな？」

「規格外？ 漫画じゃあるまいし。普通に努力したんだ」

「人を殺すことに努力か、面白いことをいう人だね。人を殺すのは本能だ。そこに努力も何も必要ない。本能のまま君は殺してただけだろ？ 違つかい？ 人を殺すスキルなんてはじめから本能として持つてるんだ。でも其処に満足できなかった君は納得できる殺し方を探し回った。それが君の本能だ。そこしか君は生きれないから。なんと云うんだっけ？ 君みたいな人間のことをなんと云ったかな？ そうそう、社会不適合者だ」

ギリツと歯を噛み締めその眼孔に早希を捉え、口一文に結びながら切り裂きは小さい舌打ちする。

「あんたみたいな人間は大好きだ」

「これは奇遇だ。私も大好きだ」

「しかしだ。そこまでして何で『ソコ』に拘るんだ？」

「人類はみな、その答えを追い求める為に、生きているとは思わないか？ その答えが何なのかと知りたくは無いか？」

例えばの話。

哲学という学問の答えを自己見解ではなく、全員が全員、同じ見解を得られたとするならばそれはとてつもなく、気味の悪い事だとは思わないか？

全員が自己という謎かけに対して全員が同じ答えというのは有り得ない。

人生とは、世界とは、人間とは？

そんな見解を抱かずに死んだ人間も居るだろう。

しかし、その問題は、人間という種族にして最大の疑問なのだ。人が死ぬのは何故か？

何故生きなければならぬのか？

どうして死せる事が出来ないのか？

やはり人は生まれながらにして罪なのか？

罪悪の根源であると共に、永遠に出ない結論。

永遠というものがあるならば、何故人は地球から見れば悲しい程の短い時間で死ななきゃならないのか。

疑問は声にはならず。ただただ秋風の如く移ろうが如し。

しかして、それが消えないのも悲しい人間のサガ故にという奴かな……

人は何故死に、人はその後どこへ行くのだろうか？

「悲しい話だとは思わないか？ 人は結局、人という鎖に縛られたまま、セカイのどこにも行けないのだ」

そのセカイという物に地球は入っていないのだろうか。

世界は広い。人間の視野が狭いだけで。

「だから殺した と言えば理解して貰えるかな？」

唐突に簡潔に明瞭に……沙希は夕飯を頼むように普通にそう曰う。「悪い事だとは思ってはいない。いい事だとも思ってはいない。しかし。此処じゃないどこかがあるのならば、何故私達はこの世界に存在しなければならなかったのだろうか？ セカイは無数にある筈なんだ。ならば何故？ 私達は此処に存在し、此処に点在し、此処に理由という理由もなく、存在せねばならなかったのか。そもそもどうして、此処なのか。その理由を知りたくはないか？」

理由……理由ねえ。

「例えば」

「理由なんて無いと思うよ？」

沙希の言葉を遮って、そういう。

「生きていると存在理由も。死んでいるという概念理由も。何をすべきかという運命理由も。何もしないという理由論理も。宛もなくただ僕らは生きているだけ。そこに理由とか。概念とか。運命とか。論理とか。全部関係無い。あるのは理想とリアルと現実だけだ」

リアルと現実………か。

誰がリアルを現実と言ったのだろうか？ リアルはリアルだ。現実じゃあ無い。そこにあるのはリアルという仮想空間だけ。リアルは現実。現実にはリアル？

現実には現実だ。

そこに意味は無くても、そこに理由も無い。

誰もがリアルを現実という。

リアルなど初めから存在しないのに。

「相変わらず、悲観的というか悲観的論理展開だ」

「論理展開？ ただの阿呆が考えた見解だよ。そこに何も存在しない」

「希望は存在しないという事……か」

「いや、希望はあるよ。自分が希望だと 思えばの話だけれど」

それは悲しい考え方だと 切り裂きはボソツと小さく呟いた。

「悲しいとか。悲しく無いとか。それは 」「自分が決める事だよ。と言えれば良かったのだけれど、その言語は結局、言葉にならなかった。

悲しいとか悲しく無いというのは考えた事が無かったから。

生きる事に必要な事は一通り覚えただけで、生き抜ける事に必要な事は考えた事は無かったから。

それは悲しい事なんだろうか？

僕は基本、引きこもりだったから。

いや、今もか。

「あれだよ。悲しいとか悲しく無いとかは、それは神様が決める事だよ」 だから極めて笑顔を作り、極めて普通に接した。

それが最大の譲歩。

そこから先は何も言えないし、言う事すら出来ない。

何かを言えれば楽なのかも知れない。

だけど、それは多分意味の無い言葉の羅列。

言葉というのは言霊で、言葉というのは何も無いような戯言であつてもそれは意味がある。

昔、そう教えられた。魔法使いに。

「だからそう……沙希は悪くない」

「だから違つと何度も！！ 私は勝己でお兄ちゃん……」

「……勝己という人間はね。沙希。初めから存在してはいないんだよ」

冷めた目で沙希を見つめる。

「勝己という名前はね。己に勝つと書いて勝己なんだ。その名前はね沙希」

「違つ。違つ。言わないで」

深く深呼吸する。

冷たい空気が喉を伝つて、肺に送られる。

頭にも冷却機能でも積んでたらなあとか有り得ない事を思う。人間の脳がまだ機械よりも遥かに凄いという事を、この一年で僕は知つた。

あつという間の一年だった。

口を開け、その言葉が喉から出掛かつて、止まり、後戻り出来ないと知つて……僕は口にする。

「 勝己は君の名前だ」

沙希の顔が破顔する。

笑顔であるならばどれだけ良かったか。

「君の名前は勝己。女の子っぽくない名前だからと、僕に譲った名前だ。僕は名前すら無かったから。名前があるのならば良かったのだけれど……生憎僕の脳みそはポンコツで欠陥品でね。もう何も思ひ出せないんだ」

糸の切れた人形みたいに沙希は足元から崩れ落ちた。

閉章：認知と幻

埃まみれ。寧ろ誇りまみれの工房で、やはりあの人はいつも通り、壁画を直していた。

「……………おかえり」

「……………この場合、なんて言えばいいんですかね？」

「ただいまでいいんでない？」

相変わらず掃除をしない人だと思う。

つつか、掃除しろよと言いたくなるがそれは僕の仕事？ なので

まあよしとしよう。

部屋の隅に転がっていたアンティークなのか、それとも不良品なのかは分からないが三本足の椅子に座り、背もたれに体を預けた。

「もうちよつとで終わるから少し待ってくれ」

返事することも出来ずにとりあえず首だけ頷いて、スーと息を吸い込んでふうと吐き出した。

何もなくていいという事は、何をしてもいいということ。

そんな名言を残した偉人？ はだれだったか。

たしか中学生の時に感銘を受けたのを今でも覚えてる。

しかし、それはそれで矛盾もはらんでる回答だと気づいたのはやはり中学の時で、それを教えてくれたのはやはり魔法使いだったはず。

なんであんな馬鹿と今でも友達として付き合っているのだろう。

まあそれなりに楽しんでるからいいんだが……………なんというか僕とずっと付き合っているというのも珍しい人物と言えば珍しい。

現実には小説より奇なり。ねえ。

なにもすることが無いので、少し目蓋を下ろして今までの疲れを足元から出すようにゆっくりとまたため息を吐き出した。

「なんだ相当疲れてんだな」

「まあ……………今回は僕が終わらしたというより、切り裂きががんばっ

てくれましたから」

ん？ と何故か納得しかねるように春日井さんは首を捻る。矛盾に気づいたのだろう。そもそもそんなに動かなかつたらそれこそ疲れないだろとでもいうように。

「確かに肉体的にはしんどく無かつたですよ？ でも事件があまり……片付かなかつたです。沙希だつて『毎度』のように倒れましたし」

「そつか……じゃあまた失敗か　でも殺したんだろ？」
「仕事はきつちりしますよ」

失敗か。そう呟いて、春日井さんはまた修復に戻る。

失敗。成功なんてしない気がする。何年も同じ事を繰り返しているんだから。

沙希の中には勝己が居る。何年も何十年も同じ体に宿っている。だけどそれは所詮は自分が作り出した人格で、沙希はそれをお兄ちやんだと思っている。でも初めから勝己などいないのだから勝己は沙希で沙希は沙希だ。まあそれを演じている彼女は本当に人が代わっているといつてもおかしくはないのだけれど　でもやはり沙希は沙希なのだ。どうしたつて彼女は勝己にはなれない。

多重人格でもなければ、二重人格でもない。彼女は彼女で。彼も彼である。ども人格は一人だから結局は一人芝居だ。

「どんなものなのかね？　同じ体と同じ精神。同じ記憶を持った人間が二役をやるといふのは」

「さあ　結構面白いんじゃないですかね？」

「今度また殺す時に聞いといてくれよ」

さらつと春日井さんは物騒なことを言う。

「何も答えてくれないと思いますよ。自分だと思つてないんですから」

「なんとかアイツも難儀な性格してるなー」
「ですね」

春日井さんはポケットからしわくちやのタバコを取り出すと、流

れるような動作でタバコの先端を焦がす。

それがなんとも優雅でついつい見とれてしまった。

「そういえば、もう一つの事件は？ 解決した？」

「解決もなにも……初めから解決してるじゃないですか」

え？ と驚いた顔をする春日井さん。

「人間には無理なんですよ？ つうか出来ないことなんですよ？」

口の端にフィルターを咥えたまま春日井さんは首を捻る。

「そりゃそうだが……まさか怪物とかって見解か？」

呆れたように煙を吐き出して春日井さんは言う。

「まさか 人間でも無理で、本人でも無理で、人間に出来ないというなら、疑うのは一つだけじゃないですか」

「ん？ 他に疑うことなんてないだろ」

「あるじゃないですか一つだけ」

「なんだよ？ 流石の私でもわかんねーぞ」

「情報です。二人一緒にしんだんですよね？ それで二人とも腹刺してしんだと。じゃあそんな事出来るのは死体扱ってる奴しかいないんじゃないんですか？ 書類書きかえれる奴とか。まあどちらにしろ犯人は警察ですよ」

あぐりと口を空けて、春日井さんは左手を自分の額にあてる。

「お前さ なんとというかホントにそんな見解してんのか？」

「ええ。マジです。というかそれしか考え付かないですよ。人間に出来ないんですよ？ 自殺でもないんですよ？ ならば情報がおかしいですよ」

まあ可笑しいのはそういう事を普通にする人間のほうなんだが。

「他に犯人とか考えつかないのか。殺し屋とかそんなの」

「居ませんから」

「二重人格も切り裂きも魔法使いも居たのに殺し屋は居ないか……
なんとも屁理屈な頭してんな」

「自分の見たもんしか信じないんですよ。そういう性格なんです」
春日井さんはため息と一緒にため息を吐き出すと、冷めた目で見

てきた。

「何とも嫌な餓鬼だな」

「そうですか？ 結構普通ですよ」

そういつて椅子から立ち上がり、出口へ向かっていく。

「……なあ一つ聞いていいか？」

振り返ると春日井さんが、猫のような目をしながら僕を見てくる。

「お前さ。誰なんだ？」

誰という疑問文に答えるほど僕は僕を生きていない。

「じゃあヒントだけ。僕は××××××××です」

ドアノブに手をかけた。

「また縁があつたら、あなたに会いたいですですね」

ドアノブを捻る前に青年の姿は掻き消えた。

まさか私が騙されるとは思ったことも無かった。

「まさかホントにいるとはね。××××××××か。はっ！ やられた」

初めっから何も起きていなかったのか。

完

閉章・認知と幻（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296c/>

多重変奏曲

2010年10月8日15時50分発行